及び、李綱は戰を主としたるが爲めに南方に貶せられ、勇將种師道も次で歿しぬ。同年末、汴京遂に陷り、欽宗敵營に赴て、降を請ひ、翌靖康二年、金兵大に城を掠め、四月、徽宗・欽宗以下宮中男女三千餘人悉く捕虜となりて金兵に伴なひ去られたり。王船山の論に據れば、凡そ傾けるものは傾くに任せて全く倒れさせ、更に奮つて之れを立て直すを可とす、立て直す力無き程ならば、如何に倒るゝを支えんとするも其の效なし、李綱が徽宗に禪位を勸めたるは、人心を動搖せしめ、集結の中心を失はせたるもの、又一旦汴京を棄てゝ更に恢復を圖るの果斷を缺きたりしは、却て敗亡を速めたるものにして、李綱の罪輕からずといふべきなり。

勢止むべからずして、其の極まる所に極まらしむれば、必ず一大轉回を爲して而して後に定靜に歸するものなり。故に周易に曰く、傾否、先否後喜（ニニシテアトニヨロコブ）と。否運の極盛なる時は免かれんとして免かるべからず、斷念して運に任せ、却つて安泰の境に達するを得べし。此の斷念を爲し得ずして終りを善くせんと欲すれば、否運を棄つる能はずして、己れ自から棄つるの不幸を見ん。國を謀る者、志患ならざるにあらず、道正しからざるにあらず、君衰へ民苦しむを見るに忍びずして之れを補救せんとし、如何に傾聽すべき論を立つるとも、結局救ふ能はざるのみならず、却つて危亡の難を益すに了る。是れ否運を棄つるを敢てせずして、否運に附き纏はるゝが故なり。

宋は徽宗の末年に至りて、必亡の勢止むべからざりき。匪徒女眞の強は、之れを防ぐに由なかりしなり。匪徒童貫が金人の手を借りて遼を滅ぼさんとせしは失策なりき。就中、匪徒王黼が、遼人張瑴の金に從はずして宋に降れるを容れたるは、金人を挑んで其入侵を招くに同じかりき。徽宗は人の君たるに似ず、蔡京は君の相たるに似ず、年長けてなほ稚氣を存し、嬉遊に耽りて放蕩に流れ、人心離散の危機に際して、此くの如き君主と宰相とが國家の大難に當りたり。かくの如きは、一として必亡の勢にあらざるはなし。是に於て、宇文虛中は帝をして己れを罪するの詔を下さしめ、吳敏・李綱は、徽宗をして帝位を子欽宗に內禪せしむるの策を定めたり。是れ否運を防ぐの道に非ずと謂ふべからず、されど國都汴京破れて、二帝（徽宗・欽宗）捕虜となり、挽回の望み絕へたるは如何にぞや。

徽宗が位を欽宗に禪りたるは、金人の入侵に對して死守の計を決したればな

り。死守には必ず死守の方策あり。朝廷の大事を決するに足るべき者は、唯李綱のみにして、李綱の外に其人なく、軍事を托するに足るべき者は、唯种師道のみにして、种師道の外に其の人なかりし時に方つて、二人の謀と勇とを盡して、以て能く當時の急を救ひ得たるべきか。朱子已に之れを論じて、二人未だ恃むに足らずと謂へり。況んや李綱は逐はれ、种師道は死し、汴京の孤城に據り、人心懈散の危機に陷り、一日の苟安を貪らんとし、人心振はず、何等の發奮だも示さゞりしに於てをや。諸葛孔明と雖、其の主蜀漢の昭烈帝が吳と戰つて荆州に敗るゝを止むる能はず、郭子儀と雖、其の主唐の代宗が吐蕃人に脅かされて陝州に出奔するを救ふ能はざりき。是れ勢已に傾きて其の傾き了らざる間は、否運も亦全く除き去るを得ざるが故なり。外難は中より之れを防ぎ、內亂は外より之れを制し得る程の餘裕ありて、始めて自立の態度を保ち得べく、自立するを得てこそ人をも防ぎ得る道理なれ。先王は、諸侯を藩屏として時々巡視を行ひ、威令能く行はれたれば、威令の及ぶ所凡べて天子の居とするに足りしなり。されば周の襄王は、內亂の爲めに國都洛邑を去りて汜水のほとりに居りし事あり、春秋に、襄王出奔を記して天王出でて鄭に居ると謂へるは、其の居の不可なきを示したるなり。天下の中、いづくの地にも安居するを得べしとすれば、いづくの地に於ても自立し得べき筈なり。然るを久しく居るべからざる不利の地に拘束せられて自から困むに至るといふ程ならば、天下は既に己れの有に非ず、いづくに赴きたればとて其の地と其の人とに依賴するを得べからず。是れ勢の傾くを免かれんとして到底免かるゝ能はざるもの、いかんぞ、否運の消え去るを望み得べき。

徽宗は汴京を棄て、南奔して金人の寇を避けたり。勢已むを得ずして避くるとせば、避けたりとて滅亡に陷る程のことなし。首領を失はざる間は、命脈絕ゆるに至らず、天下は皆天子の所有なれば、天子一旦都城を棄てたればとて、未だ國家を失へりとはいふべからず。徽宗が必亡の不幸を招きたるは、內禪して位を欽宗に委ねたる一事に在り。位を欽宗に委ぬれば、徽宗は則ち天下の君に非ず元來人の君たるに適せざりしに、又位を委ねて自から政柄を失ひ、隱居の人として退きたる以上は、いづくに赴くと雖、その地とその人とを左右する能はず、而して主權を委ねられて强虜の金人を防がんとする者は、危城（汴京を指す）に孤立せる嗣

主欽宗なり。是れ徽宗が出奔したるは尙ほ可なりとしても、內禪の失策は遂に救ふに由なかりしなり。

唐の玄宗が、安祿山に攻められて蜀に走りし時、其の太子は、北に向つて靈武に走りぬ。靈武に在る者は、尙ほ太子にして天子にあらず、玄宗は猶ほ隱然東南の人心を繫いで天子の威を保てり。太子（肅宗）立つと雖、身を外に置きて西北の人心を收めたるが故に、捲土重來して京城（長安）を恢復するを得たりしなり。欽宗內禪の命を受けたれば、是れ天子は固とより汴京に在るものといふべく、走つて東したる徽宗は、已に天子にあらざりしなり。在朝の官人は、類ね讒賊の小人にして城を守れる將卒は、唯一身一家に戀々たりし輩なり。李綱は、彼等の意向に曲從し、欽宗を擁して、汴京の孤城に拘束せられて去る能はず、揚言して、死すとも去らじといひ、家產を抱いて遷徙を惜める愚民は、大に喜んで一日だも無事ならん事を希ひ、古の晉の懷帝・愍帝の覆轍に懲りもせず、愚かにも復び之れを蹈むに至りしは、惜みてもなほ餘あり。

さきに內禪の事なからしめば、徽宗國都を棄つるとも、人は吾が君の尙ほ健在せるを知り、奮死の心を失はず。帝乃ち大權を握つて勤王の兵を招き、天下の廣きを利用すれば、群小駭き散じて、紛々たる空論に煩はさるゝが如き事なきを得ん、而して太子は、帝の命を奉じて軍を統べ、唐の肅宗の子廣平王が元帥となつて軍功を建てたるに倣ふべきなり。其時勢を考ふるに、後に汴京陷り、欽宗の弟康王（高宗）が濟州に飄泊したる頃に較ぶれば、十倍百倍の有利なる形勢を占め居たりき。李綱之れを悟らず、四面敵を受けたる孤城（汴京を指す）を惜み、空論百出の朝廷を控へ、姦邪の佞人を牽る、都會の繁華に戀々たる童幼婦女の望みに任せたり。かくて金兵退くや否や、城中の歌舞前日の如く、復た後日の備へを爲さんとする心なかりき。或者は謂はん。當時君國を存して安泰の計を立て、國家の潰滅を支へて人民を安んじたるは、李綱の力にして、其功不朽に傳ふべきなりと、書經の盤庚に胥動以浮言（ヒトシクスルニ）といへるは是の事にして、浮言妄語何んぞ論ずるに足らんや。

徽宗は、退位自由の身となり、飄然として國都を棄て翩然として復た歸り來り唐の德宗が、國都長安を去り、奉天に居りて堅守したるが如くなる能はず。欽宗は、姑息苟安の態度に甘んじ、其の命令行はれず。唐の肅宗が靈武に居りて能く

人心を繫ぎたるが如くなる能はず。都城の官吏軍民は安佚に浮かされ、一喜一憂毫も定まれる心なく、唐の朔方邠寧の軍が憤起して賊軍に當り、以て恢復に努力したるが如くなる能はず。禍は轉瞬に在りしを、如上の形勢に安んじて萬全を期し居たりき、李綱何ぞ之れを思はざりしか。當時汴京は一大都城にして殷盛の地なりしかば、一朝にして之れを棄つるに忍びず、君を奉じて固守せんことを欲したるは、憂國恤民の誠意に出でたりと認められざるにあらず。然るに、目前の殷盛は、瞬間の浮榮に過ぎず、忽ち凋落して殘る方なき幻夢となり了んぬ。徽宗欽宗は捕虜となり、六宮の美人は奪ひ去られ、金帛は掠め盡されて、空城たゞ凍餓を餘すのみとなり了んぬ。曾て瀕死の城を出でて別に活地を求めんとはせず、上下相率ゐて敗亡に陷りたり。城を棄つるに忍びざりしと言ふと雖、結局國家亡滅の不幸を忍ぶに至りしは、豈に慘ましからずや。故に李綱は、或るものを惜みたるなれども、大に惜むべき所のものを忘れたるにて、是れ李綱の重大なる過失なり。嗚呼、謬見行はれ、狂夫己がまゝに振舞ひて、遂に敗天の悲痛を遺せり、李綱其の元兇たるの罪を免かれざるもの歟。

第九章　欽宗論

第一節　靖康事變の眞の禍源は王安石にあらず

小序　欽宗の靖康元年、王安石を追罰するの議起り、楊時(號は龜山)の如き、殊に王安石を排擊し、朝廷其の議に從ひ、王安石を孔廟に配享するを止むるに至れり。本論の大旨は、靖康の事變を招きたる元兇は、蔡京及び其の與黨にして、禍源を王安石に歸するは、餘り遠きに過ぎ、欽宗は蔡京の與黨を排除するの急務なるを覺らざりきと謂ふに在り。

危きを扶け傾くを定むるには、其法あり。唯危きを扶け、傾けるを定めんと焦慮するのみにては其效なし。傾くといひ危しといふは、既に事勢の末に屬し、傾危を招く所以の本あるを知らざるべらず。危き所以の本を尋ね、傾く所以の本を探り、以て其の反正を圖るべきなり。本末の關係といひても、遠く相離れたる

ものと、近く相接するものとあり、從つて、其本を正しうする手段にも、時に由つて緩急の差あるべく、必ず其の場合を審にして適當の手段を施さゞるべからず。然らずんば、其の本を推究すとも、其の末を救ふの效なかるべし。弊害の本源遙に遠きものは、時を經るに從つて、變じて舊態を失ひ、末に近き所に至つて眞の害毒を現はすものなれば、是の眞の害毒の生ずる所を尋ねて之れを矯正すべく、唯遠く本源に溯りたりとて、已に時勢を異にするが故に、匡正の手段を施し難きに至るべし。彼の黄河汎濫の大患は、其の下流に於て之れを防がんとしては其の效なし。神禹は、黄河の疏通を企てゝ、其の上流に溯り、壺口より開鑿に着手して冀州の水害を治め、中原の水害は、黄河が底柱山東より山峽を出でて滎澤・潔水に溢るゝ邊に起因するを知りぬ。黄河の大源は、遠く西極の崑崙山に在り、然れど崑崙のほとりまで河源を窮めたりとても、兗州・豫州の平野に於ける下流の氾濫を治め難し。故に黄河の水害を治めんと言ふ者は、遠く其の大源にまで溯らんと欲するものなきなり。

靖康の禍は、王安石が新法を行ひて小人を進めたるに始まれり。而して彼の蔡京は書畫玩好を以て童貫に紹介せられ、徽宗の好みに投じたるに由り、次第に大位に登り、群小を引き、君を迷はせて外侮を招くに至りぬ。彼れが神宗の諸政を紹述すと稱して、王安石を尊奉し、其の像を殿中に掲げ、孔廟に合せ祀りたるは皆之れを利用して衆賢を威壓し、姦佞の野心を逞しうせんと欲したるのみ。王安石が中不害・商鞅の政策を學んで富强を圖りしは、國を利して、其の功に誇らんことを期したるにて、私を懷て君を淫惑に陷れんとしたるにあらざるは、疑ふべからざる所なり。王安石の志は、豈に蔡京の志ならんや、蔡京の政は、豈に王安石の政ならんや。

されば靖康の初、内を靖んじ外を禦がんとするに當り、禍害の本源を追究すれば、則ち蔡京・王黼・童貫・朱勔の輩が朝政を亂し、外敵を招きたるに在りとこそ謂ふべきなれ。李邦彦・白時中・李梲・唐恪の流が政府に尸位し、割地を主張し、入衛の兵を罷め、大河の防を撤したりしは、皆蔡京・童貫の輩が同氣相求めたる緣に因りて進用せられたる者共なり。彼等は元來姦邪の出身にして、放蕩に慣れ、志氣萎縮して唯人の鼻息を窺ひ、苟安を求むるに汲々たるものなれば、如何んぞ王安石の

云々する所を知り得べしや、唯蔡京・童貫の術を師として凶危に處し、請和の外何の技倆もなく、旦夕の佚樂を恣にしたりしのみ。蔡京・童貫等相次で罪に伏したりと雖、彼等が引用したる衆多の愚人は、尙ほ勢を保つて未だ亡びず。是の時に當つて、國の爲めに姦を除かんとせば、憚る所なく蔡京・童貫が禍の本たりし旨を直言し、以て其の黨類を斥け、群賢を進めて、扶危定傾の大計を決行すべきなり。唯た此くの如くして、初て本を知ると爲すべし。骨已に冷かに、黨類已に散じ、法已に行はれず、事勢已に相關する所なき王安石の是非得失の如きは、事態平靜に歸して後、徐に之れを論定するも晩しと爲さゞるなり。

然るに、目前腹心の害を措きて、已往の禍源を追究するを勉め、楊時（號は龜山）崔鶠など、之れに雷同し、恰かも國の危きを幸として積日の不平を洩らさんとするに似たり。朝廷に列れる者は、皆柔弱淫逸の小人のみなるに、敢て之れを逐はんともせず。かくて彼等群小は、王安石を借りて自から標榜し、吾等は固より臨川氏（王安石は臨川の人なり）の與黨なり、吾等を排斥する者は元祐の苗裔なりと揚言す。彼等が王安石の爲めに辯護を試むるは、憂國の誠あるにあらず、君の耳目を惑はし、朋黨を結び、寵利を固うし、國事を破るばかりにて、其の姦惡を禁ずるに由なきなり。

安祿山の大亂を招きたる楊國忠馬嵬驛に殺されて、唐再び興り、敢て前宰相李林甫の姦を追究する必要なかりしなり。徽宗の建中靖國年間の初に於て、學術を辯じ、人心を正しうし、風俗を善くし、綱紀を定むるの策を講ぜず、事已に大に敗れて後、久積の忿怒を洩らして王安石の罪を追究せんとするは、禍源の探求を誤れるものにして、あまりに遠隔に過ぎ、畢竟何の益かあらん。後に、南宋の高宗建炎年間に至りて、王安石の說は、攻擊を待たずして自から消滅したり。王安石は攻むるに足らず、然かも靖康年間の急務にあらざりし事を知るべし。忠を竭くし力を盡くし、直ちに蔡京・童貫の與黨を糾責して、其の和議を斥け、以て國家存亡の大事を審議したりしならば、空論の患なく、一致の方針を執るを得たりしならん。かくの如くしてこそ、初て本を知ると謂ふべきなれ。

第二節　空論を弄して北宋亡びたり

小序　宋朝の群臣、紛々たる和戰の論を闘はし、一致奮戰の勇を缺き居たる間

に、金(女眞)の精兵深く入りて、汴京を陷れ、靖康二年四月、宋の徽宗・欽宗擄せられ北宋こゝに亡びぬ。金人乃ち、宋人張邦昌を立てゝ楚帝となし、汴京に居て河南を治めしめ、後更に、宋人劉豫を齊帝となして、又河南の主たらしめしが、南宋の紹興七年、金人劉豫を廢し、同十一年、宋金和議成り、淮水竝に大散關を以て國界となせり。本論の大旨は、宋人が、敵の意圖を審にすることなく、又確乎たる發奮の勇もなく、徒らに口舌の空論を弄して、防衛の實務を顧みず、遂に大禍を招くに至りし所以を痛論したるなり。

女眞宋を脅かして、三而して鎭(河間府(今の直隸省河間縣)中山府(今の直隸省定縣)太原府(今の山西省陽曲縣)兩河(河北路と河東路とにして前の三鎭は其の中に含まる)を奪はんとし、宋廷の臣、之れを與ふべきや否やに就きて爭論紛々として決せざりき。

其爭論を見て、宋の必ず亡ぶべかりしを知るなり。宋の亡びたるを見て、是れ中國の禍を永久に遺したる所以なるを知るべきなり。李邦彥・聶昌・唐恪の徒が地を割きて寸時の死を緩めんことを請ひたる卑劣の態度は論ずるに及ばず、徐處仁・吳敏より李伯紀・楊中立に及ぶ人々が、地を割かざるの策を堅持したるは、義正しといふべし。然りと雖、是の人々は、能く女眞の、內情に通曉して、不割の計を善しとしたる者なりや。敵の內情を知らずしては、計を立つと雖、其の效なし、況んや、當時能く三鎭兩河を固持すべき計なかりしをや。

人を脅かして地を奪へるは、曩に契丹の石晉(五代の後晉)に於ける、秦人の三晉(鄒趙魏)に於ける如き例あり、是れ皆進んで奪略したるに非ず、脅かされたる者が自から地を割きて與ふるを待ちたるなり。契丹が石晉を脅かしたるは、石晉が後唐の潞王(王從珂)に叛きて救を契丹に求めたる時に在り、契丹が得んと欲したる燕雲十六州の地は、當時なほ王從珂の領土にして、契丹の有にもあらず、又石晉の有にもあらざりき。秦人が三晉を脅かしたる時、三晉弱かりしと雖、城に據つて固守するの心ありしかば、强ひて地を奪はんとすれば、軍を覆へし將を殺すを期せざるべからず、故に曠日持久の後を待つて、徐ろに其地を得たり。卽ち、先づ脅かして割地を求め、勞せずして之れを取るを得たるなり。女眞の勢は之れと異る。女眞が盟を破りて南侵して以來、無人の境に馳突し、一城に至れば一城潰え、一城潰ゆれば一路(路は宋代の行政區劃の名稱なり)潰えざるはなし。三鎭を欲すれば三鎭を得べく、兩河を欲すれば兩河を得べし。使者の嘵々たる口舌を煩はさずとも、宋をして己

れの欲する所に從はしめんこと、信に易々たりしなり。嗚呼、當時議者宋朝に盈ちて、曾て一人だも是の事情を察するものなかりき。中國の人なきや久し、禍乃ち延いて無窮に及び、遂に止むべからざるを如何にせん。

遂已に亡びて、女眞已に志を得たりとはいへ、未だ中國を併呑するの企圖を有せざりしなり。宋人之れを招き、之れを挑み、自から防備を撤して女眞の侵入を導きたり。是に於て、女眞は宋を壓迫せんと欲するに至りしが、然かも尙ほ決心する所なかりしを、女眞に敎へて、宋を脅かし、地を求め賂を求めしめたる者は、郭藥師なり（郭藥師は元と契丹の將にして宋に降り又叛きて金に降れる者金軍の南侵を導きたるものは是の人なり。）郭藥師は、嘗て契丹が宋を脅かしたる態度を習知して之れを女眞に敎へたるものなり。女眞の宋に對するや、地を求むるのみ、賂を求むるのみ、屈從を求むるのみ、女眞の世を終ふるまで是の三者に止まれり。宋の國破れ、宋の君擒せられ、大河以南全く守を失へるに至りても、女眞、之れを張邦昌・劉豫（二人共に宋人なり北宋亡びて後この二人相次で金人に立てられ宋の故地に王たりき）に授け、自から之れを領有するを欲せざりき。是れ、自から貪欲を制して、禍に罹るを防がんとする用意に出でたるなるべし。

晉の永嘉年間以來、南北分立し、蠻夷と中國と、各、江淮を以て界となし、爾後沿習して、大局こゝに定まり、蠻夷も之れを以て滿足し居たるなり。宋の汴京破れ、女眞（金）が張邦昌・劉豫を立てたるは、契丹が石晉を亡ぼして後に其の地を棄てたるに倣へるなり、宋金和議成りて、金が淮水を以て界となしたるは、拓跋氏（南北朝時代の北朝の後魏國）が南朝に對する對度に循へるなり。蓋し、前秦王苻堅が東晉を擊つて潰敗せし以來、王猛の言は永く定鑒となれり（王猛は苻堅の宰相なり歿するに臨み遺言して晉は江南に偏在すと雖之れを侮りて兵を加ふるが如きことなかれと謂へり）故に拓跋佛狸（後魏の太武帝）は、宋を攻めて大江に臨みしが、敢て渡らざりき。正統の名を有する者は、天の冥助を受け、外敵いかに猛威を振ふとも、其の國自然の險要を超えて侵入することなし。

女眞は敢て中國を併呑するの意なく、我れより進んで地を與ふるを待つものなるを知らば、宋の執るべき方策は自から明らかなり。三鎭を割かざらんとせば必ず三鎭を守るべく、兩河を割かざらんとせば必ず兩河を守るべし。三鎭兩河を守らんと欲せば、必ず大河を固守して根據と爲さゞるべからず。大河を守らんと欲せば、必ず芻糧を備へ城堡を繕ひ、秦隴吳蜀三楚の力を集めて、以て國都

を衛るべきなり。之れをしも謀らずして、但だ祖宗の彊土は人に與ふべからずと言ふのみにては、假令我れより之れを與へざるまでも、外敵を制して之れを取らざらしむること能はず。かくて、空談無實、爲す事なくして徒らに遷延する間に、三鎭兩河は、與ふるを待たずして早くも敵手に陷れり、女眞の輕騎汴京に馳突して、宗社永く亡びたり。既に我が彊土を捨てゝ人の爲すがまゝに任せたるなれば、割くも割かざるも、論ずるに及ばざる道理ならずや。

女眞の欲する所は、三鎭に止まり、天中原を以て中原の主に授けたるなれば、吾れ敢て力爭せずと言へり。されば、金の將軍撻懶・兀朮の二人は、宋を攻めつゝも和好の意ありて、人其の志を惟しめり。兀朮の如きは、金山（建炎四年、宋將韓世忠大に金軍を金山に破れり金山は大江の中に在りて鎭江に近し）に大敗し、辛うじて免かれたるを幸とせり。金主完顏亮、一たび南侵して大江に至りしが（宋の高宗の紹興三十一年）其の部下叛き離れて、金主を弑したり。然らば則ち、當時の形勢に處するに方りては、三鎭を問ふこと勿れ、兩河を問ふこと勿れ、汴京の守るると守らざるとをも問ふを要せず、堂々たる天子の名號に據つて、晉く勤王の兵を集め、天子親から六軍を率ゐて女眞と相頡頏すべきなり。此の際女眞をして欲するがまゝに河北を得しむとも、女眞は其の願を滿たして後は、氣疲れ力疲れ、唯安逸に甘んずるのみとなるべければ、宋は、尙ほ徐ろに天下安定の策を講ずるを得べし。假令女眞の爲めに破らるゝとも、女眞をして意想外の大利を獲得せしめ、益〻其の飽く所なき欲望を長ぜしむるが如きには至らざるべし然るに、宋の無氣力なりしが爲めに、女眞は意外の大利（北宋の滅亡）を穫得し、其の奪取せる地方に宋人張邦昌を立てゝ、張邦昌之れを領する能はず、更に宋人劉豫を立てゝ、劉豫も亦之れを治むる能はず。かくて大河以南の地に主たるものなく、人は自から女眞を戴きて君と爲すに至る、大河以南已に然りとせば、江淮以南と雖、何ぞ女眞を戴きて君となさゞるべき、宋の運命窮するに至るは當然なり。後日、蒙古は、天に定情なく地に定域なく、惟だ實力如何に在るを知りたれば、凡そ取るべきものにして之れを取り得ざる無かりしなり、宋は遂に蒙古の爲めに滅ぼされ了んぬ。

嗚呼、宋人の女眞に對するや、女眞が敢て深く求めざるの內情を察せず、弱き者は恐れ靡き、强き者は囂しく論議を弄せり。此の如き趨勢いかに永く繼續すと

も、所詮力及ばずして、國家永遠の基礎を壞るに了らんのみ。故に曰く、中國の人無きは、一朝一夕のことにあらずと。東晉の謝安石字は、能く事宜に通じたり、故に寡兵を以て前秦王苻堅の大軍に抗して恐れざりき。我自から賴むに足るの計を立て、持重して外敵を待たば外敵の鋒自から碎けん。彼我の事情を審にすることなく、徒らに大言壯語して人を驚かし、俗輩も亦之れを仰で偉人となし、其の實一顧にも値せざるものなるを覺らざるが如きは、是れ大に哀むべきなり、而して、是れ實に北宋の亡びたる所以なり。

第三節　上下交爭は國家の大害なり

小序　欽宗の靖康元年二月、帝、金人に謝罪するが爲め、尙書右丞行營使李綱を罷めたりしに、大學生陳東以下都民數萬、汴京の宣德門に聚まり、怒號して復た李綱を用ひんことを强請す、帝變を生ぜんことを恐れて之れを容れ、群衆漸く解散したり。曩に神宗の崩じたる時、群民司馬光を迎へて其の宰相たらんことを乞ひたることあり。王船山之れを論じ、上と下と相爭ひ群民强請を敢てするが如きは、政治の大害にして、國事に任ずる者は、此の如き交爭を招かざるやう愼重の思慮あるを要すと謂へり。

上と下と交〻爭へば、其の國必ず傾く。大臣は能く上の意を諒として、下と爭はしめず、在朝の諸君子は、能く下を和らげて上と爭はしめざるを良しとす。上下の爭を聽て裁斷する能はざる者は、唯數に備はるのみの臣なり。其身交爭の中心となりて、上下の爭を仲介する者は、己れ自からは別に思慮ありとしても、實は上下の災を招くものにして、衰亂の世には此の如き人常に多し。此の如きは、人望を占むるに足るべしとはいへ、思慮ある者の爲さゞる所なり。

凡そ爭の興るは、皆據るべき名あり、循守すべき先例ある筈なれども、上は信ぜず、下は從はず、互に我が意を張りて遂に爭に及ぶものなり。其の爭ふに當つては、意短けれども言長く、言順なれども氣烈し。氣烈しければ、得失利害存亡生死の如何を顧みずして、憤激抑へ難き勢を示す。書經の盤庚に、胥動以浮言（ヒカスニテフ）と謂へり。言は、其の是非を問はず、苟しくも浮虛にして實に中らざれば、是なるものも非となる理なり。思慮ある人は、之れを畏る、豈に身自から浮言の衝に當るを敢てせんや。氣の浮いて中正を失するは、權に乘ずればなり、浮氣動て後は、復た憚

る所なし。崇高の位に據り、一人を以て天下と爭ふ、是れ上の權なり。衆多を恃み、匹夫を以て天子と爭ふ、是れ下の權なり。權は、勢の乘ずる所なり、氣に發し、勢に乘じて權を振へば、理に合ふ所ありと雖、實は亂の始を成すものなり。故に、其の國必ず傾くといふなり。

漢唐の季、其の傾くや、皆上下交爭の故なりしが、殊に宋を甚しとす。上の下と爭ふや、之れを斥け、之れを詘け、之れを竄し、之れを禁じ、之れを記錄に留め、之れを石に刻し、大聲疾呼して天下に告げたり。神宗の熙寧年間より後、邪黨も正黨も同じく此の如き態度を執り、王安石司馬光は、實に身を以て其の衝に當れり。是に於て、下に在る者、上と爭ふに至り、屋に登り樹に上つて宰相を命ずるの權を爭ふものあり（神宗崩ずるや司馬光洛陽より來つて臨哭す衛士其の馬前に集まり留まつて宰相たらんことを乞ひ士民聚觀するもの數千人に及べり司馬光懼れて洛陽に歸りぬ）其の先例に激せられ、後には、萬衆奔號、宮門に迫りて李綱の爲めに不平を鳴らす者あるに至れり。上に在る者違ふ所ありて、下に在る者之れを憤り、下に在る者爭ふ所ありて、上に在る者之れを疑ひ、上下相抗して、利害生死をも憂へざるに至るなり。

王安石の新法が民を病ましめたるに因り、迫つて司馬光を宰相となし、新法を除去せしめんと欲したるは、情理なほ正しと謂ふべし。されど朝政に關する廢置存除の如きは、豈に一時の氣に任せて熱狂せる輩の欲するがまゝに從ふべきものならんや。李綱が人望を占めたりしは、惟だ徽宗の內禪を請ひ、京都を守り市中の繁華を保ち、姑息偸安の策を講じたるに過ぎず、後日、汴京陷りて、金帛は奪はれ、子女は掠められ、百萬の生民雨雪の下に流離し、死するもの過半に及びたるを想はゞ、早く貨財に戀々たるの情を棄て、都城の危險を避けて妻子を保全し、後日の活路を求むるの計を爲すに如かざりしなり。然るを婦人稚子の輩は、李綱の德に感じ、信賴の餘りに却つて亂民を鼓舞し、大衆遂に腕を扼して進み、君民の禮を無視して宮門を踐み荒らすに至りぬ。此の如くにして國家尙ほ安存すべしと謂ふや。

司馬光が志を行ふを得ざりしは、正に之れに本づけり。哲宗親政の後、帝は司馬光を疑ふこと深く、彼れは亂民を率ゐて上を脅かし、自から推して宰相に上りたる者なりと爲せり。哲宗は、司馬光を以て、目に君主なきものと認めたれば、則

ち其の名を元祐黨籍碑の筆頭に列し、盡く司馬光が元祐時代の政治を覆へし、從つて章惇・蔡京の姦を恣にせしめたり。是れ實に群民盲動の弊害に外ならず、李綱の如きは、識足らずと雖、忠は則ち餘あり、闇主姦臣も、彼れが缺點に乘じて之れを排忌せんやうなし。然るに、一たび竄せられ、再び竄せられて、志終に伸びず、高宗の世に至つては、彼れが忠烈の行迹も明白となるべかりしに、尙ほ朋黨を結んで私を行へりといふ誹を受け、彼れを稱揚したる陳東が重刑に陷りしは、是れ他なし、惟だ彼れが爲めに宮闕に伏して呼號したる民衆が、不逞にして天子と權を爭ひ、たとへ李綱の罪にあらずとはいへ、行迹已に逆にして、李綱の心を明らかにするに由なかりしが爲めならずや。司馬溫公は己れを律すること嚴にして、決して群民を招致したるにあらざれども、兒童走卒の輩に推戴せられ、其の助けを得たるものなるを否み難し。李綱に在つては、危亡目前に迫り、心に深憂を懷ける際なれば、成功を期して陳東を招き、衆を率ゐて己れを謳歌せしめたるに非るや明らかなり。衆心沸騰の下に當つては、固とに如何ともせんやうなかりしにて、決して二公の瑕瑾にはあらざるなり。

然りと雖、天下の人心を靜かにして國を靖んぜんとするには、固より其道あり忠實に君と謀り、必ず行ふを宜しとする事は、煩はしき言論を要せず。公正に僚友と謀り、責任を負うて斷ずべき事は、人に待つの要なきなり。我れに同じき說は之れを受け、順當に之れを施行し、喜んで遽に着手するとなく、我れと異なる論は之れを聽き、我れの思慮を以て其可否を裁斷し、怒を色に形はすとなかるべきなり。我が意見行はれずとも、退て之れを心に潛むべし、慷慨の容を示して衆を動かし、己れ爭論の首魁となるに至るが如きと無かるべし。用ひられずして身を退けなば、濫に我が意圖を表白せず、人を激して上を怨ましむるが如きとあるべからず。失職の士、怨嗟の民に對しては、其憤怒を融和せしめ、其衷情を恤れむべく、之れを導いて存分に不平を鳴らさしむるが如きとなきを要す。

かくの如くならば、謀定まりて人知らず、功成りて言洩れず、特に忠を行ふといひ、道を試むると謂はずとも、微罪自から止み、恒に餘裕を存して、君の悟るを待ち已むを得ざる爭を激成するが如きに至らず、朝野兵民、各〻靜に上の命を待つことなるべし。巨姦猾寇ありと雖、我が間隙を窺ひ、群小を嗾かして私利を收むる

こと能はざるべし。若し終に天子に信ぜられず、姦邪に勝つこと能はずんば、是れ亦天命なり、われ自から信じて行ふ所につきては咎むる所なく、唯一死以て國家に報ずるを榮とすべきのみ。而して、士民囂々として上に抗するの戾氣を誘導することなきを得ば、則ち禍も亦永からじ。謹んで己れの分を守り、天命に順ふて心平らかなるこそ、是れ君子の道といふべきなれ。

かくて考ふるに、李綱は固よりの事、司馬溫公と雖、君子の道に合へりとは謂ひ難し。東晉の謝安石（謝安字は安石）は叛逆の桓溫に抗し、勁敵苻堅を卻けたれども、民其の德に感ずるを知らざりき、唐の郭子儀は、程元振・魚朝恩の輩に苦しめられたれども、民衆は彼れが爲めに寃を伸べ雪がんとはせざりき、宋の种師道は、老耄無能の際に至つて、尙ほ奮勵して呼躍の勇を振ひたりき。蓋し成敗の異るは其の人の志操相異ればなり。已に亂れたる時は、先づ其の上下の交爭を止むべし、交爭甚しからずば、危害も亦急ならじ、一に國事に任ずる者の思慮に係れり。子曰く君子は爭ふ所なしと、己れすら爭はざるに、何んぞ君と民との間に立ちて兩者の爭を開かんとはすべき。

第十章　高宗論

第一節　宗澤の群盜利用

小序　高宗卽位の初に當り、將軍宗澤は、汴京を守りて金軍に備へ、群盜を招撫して之れを用ひ、屢〻上書して高宗に汴京に復歸せんことを請ひたりしかど、汪伯彥・黃潛善に妨げられて志を遂げず、憂憤病を成して歿しぬ、時に年七十なりき。群盜を用ひて兵となしたることは、宋代に於て、他にも其の例あり。王船山は、後漢の光武帝が群盜を利用して成功したる所以を說き、之れを以て宗澤に比較し、宗澤が群盜利用の法を盡す能はざりし事情を論じ、且つ彼れが心事を悲みたるなり。

後漢の光武帝は、河北に奮ひ起り、僅に漁陽の一旅を以て天下を平定したりしは、群盜を利用したればなり。故に帝は銅馬帝と號せられき（銅馬とは前漢の末王莽の代に起りたる賊徒の名にして光武帝之れを降し其の人を用ひて兵となせり）南宋の高宗の時、宗汝霖（宗澤なり字は汝霖）が東京（汴京）を守りて女眞

に抗したるも亦此の術を用ひたるなり。

之れを史册に攷ふるに、光武帝に降れる群盜は幾んど二千萬なりしといふ、王莽の末、盜賊蠭起したりと雖、此の如く多數なりしとは想はれず。蓋し降りて復た叛き、一旦他盜に加はり、更に又降れるもあり、かくの如きことを再三重ね、其の數を總計して此の如く多きに上れるなるべし。然らずんば、光武帝の建武年間の初に方り、領土未だ廣からず、いづくにか粟を得て此の衆を養ふべき。宗汝霖が收用したる王善等の衆、二百餘萬と稱せり。かゝる多數のもの、盡く慓悍決死の壯夫なりしにはあらず。

徽宗の世に、河北の盜賊已に興りぬ。欽宗の靖康年間に及びて、女眞汴京を破りたれども之れを占有せず、張邦昌僭號して楚帝といひたれども、其の地を主る能はず、高宗は遠く淮左(淮南)に居りて、政令北に及ばざりき。されば河南の地方は、郡邑に吏なく、吏に法なく、遊奕の虜騎、往來蹂踐し、民其の命を保ち難く、豪强なるものは衆を聚めて砦處するに至り、農人は耕すべきの土なく、市肆に居るべきの店なく、相率ゐて之れに依り、太行山の麓に據りて旦夕の命を延ばせり。かくて、室に終歲の計なく、甕に宿舂の糧なく、鳥獸の如くに聚まり、飛蟲の如くに遊び强弱を問ふことなく、合計して此の如き多數の群盜を生じたるなり。

聞くならく、汝霖は留守の命を受け、群盜の助力を借り、之れが美名を作りて忠義といひ、以て之れを撫したりといふ。是れ豈に群盜を指して誠に忠義と爲せるものならんや。汝霖は作急に群盜を利用せんと欲したるが故なり。光武帝が群盜を用ひたるも亦是の情理を知り、之れを用ひて轉戰したれども、之れを用ひて固守せんとはせず、來る者は受け、去る者は追はず、農に歸るべき日あるに及んでは、群盜自から散じて田里に歸りぬ。されば天下既に定まつて、此の千餘萬の群盜も其の何處に往けるかを知らざりき。之れを用ひて轉戰し、之れを用ひて固守せざりしは、其の新鋭の氣に乘じたるなり。來る者は受け、去る者を追はざりしは、河内宛維の民を煩はし、之れが力を竭して群盜を養ふの不利を避けんとしたればなり。

宗汝霖が汴京を守りし時、城中の積粟、二百萬人一二歲の食を支へ得べく、之れを過ぎては固より支へ難かりしなり。されば汝霖が命を受けて京を守れるよ

り、病死するに至るまで、僅に一年に過ぎず。其の間、爲す有らんとするの念盛にして、屢、高宗に汴京に歸らんことを請ひ、大舉して河を渡り北伐せんことを希へり。彼れ蓋し、群盜を急速に利用して糧に敵に因るを可とし、久しく一所に留りて內變の生ぜんことを恐れたりしなり。不幸にして、姦邪の爲めに中より沮まれ、志遂げずして怏々として命を隕せり。彼れが歿するに臨んで、渡河を連呼すること三度に及べりといふは、唯大計の成らざるを慟きたるのみならず、此の二百餘萬人の到底汴京に留まり難きを慮りたればなり。汝霖卒して、其の部下復び散じて盜となり、流れて江湘閩粵に入り、轉掠數千里に及び、女眞の至るを待たずして江南早く已に糜爛したり。韓世忠、岳飛が速に起つて之れを收集せざりしならば、宋は必ず之れが爲めに亡びたりしならん。

食無くんば、以て兵を有つべからず、土無くんば、以て養を得べからず、進まずんば、以て土を有つべからず。食足るを得て兵を興さば、全盛の地を占めて一方の寇を捍ぎ得べし、漢の趙充國が西羌を處分したるは是れなり。烏合の衆を用ひて勢方に盛なる胡虜に抗し、已に破れたる國を保ち難きは、明らかなり。吾れ將に必ず窮せんとするを念ひ、衆の久しく聚まり難きを知り、內變の必ず生ぜんとを憂ひ、然かも別に此の危機に處すべき途なしといふに方つては、惟だ速に衆人新鋭の氣を利用すべきのみ。急に用ひて捷たば、殺す所の者は敵にして、是れ我が利とする所なり、急に進んで利あらずとするも、殺す所のものは盜にして、我れに於て損する所なし。若し夫れ之れを鼓し之れを舞し、戈を倒にして內に向ふが如きこと無からしむるに至つては、則ち主帥の恩威に存す。此の二百餘萬の盜は、固より皆山砦を有し、退て居るべき巢穴を具ふるものなれば、主帥たるものは、我が精鋭の手兵を握り、進んでは群盜の援助を利用し、退ては群盜の反噬を恣にせしめざる如く、能く恩威を施す必要あり。之れに反して、群盜をして永く一處に留聚せしめなば、唯吾が芻粟を損し、吾が農民を騷がせ、群盜をして狎侮の念を生ぜしむるものにして、其の害に堪へざる所あらん。されば、汪伯彥、黃潛善の徒が朝廷を惑はせ、高宗の意氣沮喪し、徒らに時日を遷延して汴京に徘徊するに方つては、假令宗澤をして死せざらしむるとも、群盜の處置に苦んで、事態漸く困難を加ふべき理なり。

群盜の內地に流入せるものは、韓世忠・岳飛に平らげられて、殺されたるもの過半なり。其の弱き者は、屈し散じて僅に食を四方に求め、殘存せる者の中、用ふるに足るべきものは、韓・岳の二將、之れを收集利用したるものにして、唯多數の兇賊を盡く狩り集め、之れを帥ひて嚮ふ所前なき成功を遂げたるにはあらず。故に汝霖も、獨り群盜にのみ信賴し難きを知り、頻に高宗の汴京に復歸して群盜を彈壓せんことを希ひ、東南江淮方面の粟帛を京城に運び、入援の兵卒を調發して、恢復を圖らんと欲したりしなり。當時、唯獨り汝霖の志氣を恃むのみにて、東晉の劉裕が、中國興復の盛望に由りて群雄を畏れしめたるが如くなる能はず、又唐の郭子儀が、朔方に在つて信賴するに足るべき部曲を養ひ、以て根本を固うしたるが如くなる能はずんば、汝霖如何に多數の群盜を用ふるとも、其の給養の鉅費に苦しみ、徒らに彼等の怨侮を招くのみなるべし。西晉の劉琨字は越石が、忠誠の念篤かりしにも係らず、立脚の地固からずして段匹磾に殺されたりしは、以て前鑒と爲すに足れり。

上に明主なく、內に賢相なく、始め盛にして次第に衰え、悲憤中ごろより生じ、坐ながら國家の敗亡を視るに於ては、怏々の念禁じ難く、遂に天年を隕して憤死するに至るも當然なり。汝霖の如きは則ち是れなり。汝霖若し死せずんば、群盜に依賴して、燕雲今の直隸山西二省の北部を席捲するを得たりしならんと謂はゞ、是れ汝霖が茶苦菜を食ふが如き苦心を知るものに非ざるなり。馭するに必ず其の權あり、養ふに必ず其の具ありてこそ、二百餘萬烏合の衆を利用して、其の害に逢はざるを得べきなれ。光武帝の如き聰明神武の人にあらずして、不軌の群盜を馴養し、以て虎狼の如き胡虜と生死を爭はんとするは、豈に言ひ易からんや、豈に言ひ易からんや。

第二節　人材を猜忌し朝廷の藩屏を失ひたるは宋の衰亡せる所以なり

小序　高宗の代に當つて、慷慨の臣、善戰の將、全く無かりしにあらず。然るに高宗は、女眞を怖るゝ事甚だしく、屈辱の平和に甘んじて毫も敵愾の努力を振はんとする心なかりき。其の故何ぞや。王船山之れを論じて、是れ有爲の人

材を猜忌して、自から朝廷の藩屏たるべきものを失ひ、國家の危機に際して朝廷孤立して信賴すべき人を得ざりしが爲めなり、而して是れ獨り高宗の罪のみに歸すべきにあらず、宋初以來、人材猜忌の家法を立てゝ、朝廷自家の安泰を圖りたる當然の應報なりと謂へり。

高宗の女眞を畏るゝや、身を竄して恥ぢず、膝を屈して慚づることなし、正に生人の氣ありとも覺えざる程なり。其の言動を攷へ、其の意向を察するに、秦を怖れたる周の赧王、北胡に惱まされたる晉の惠帝の比に非るなり。如何にしてかくまで志氣沮喪したりしか。李綱の言を信ずるを知らざるにあらず、宗澤の忠に任かすを知らざるにあらず、韓世忠、岳飛の功を賞するを知らざるに非ず、吳敏、李梲、耿南仲、李邦彥の徒が和を主として欽宗を誤まりし罪を罰するを知らざるにあらざりき。然るに、高宗は、親しむべきものを忘れ、怨むべきものを釋し、羞を忍び節を失ひ、陳東、歐陽澈が李綱の爲めに直言したるを忌みて之れを殺し、李綱を視ること仇讐の如く、以て女眞の心を迎へんとしたり。是れ必ずしも汪伯彥、黃潛善の二豎子が巧に高宗を惑はしたる罪なりとは斷じ難く、高宗も、是の二人の姦邪を認めて、終に之れを斥けたるにあらずや。

抑、屈辱の和議を主張したるは、唯だ汪伯彥、黃潛善のみにはあらざりき。張浚、趙鼎の如き主戰論者と雖、實は兩端の見を持して、進退定まらず、敢て和議の非を公言せんとはせざりき。李綱、宗澤を除いては、避寇求和は必ず不可なりと斷言する者なく、偶、其の位に在らざる一二の志士が之れを唱ふるに止まれり。

當時の時勢は、誠に旦夕を保ち難き危機に瀕し、高宗が躊躇畏縮の狀にありしは、深く責むるに足らずとも謂ふべく、後漢の光武帝が屢、敗れて終に屈せざりし程の識量を具ふるにあらずんば、表面いかに奮勵の色ありとも、內心實は空虛なるを如何にせん。況や初より奮勵の意氣を缺きたるに於てをや。

高宗は嘗て虜廷(金國)に質たりし事あり。金人の慓悍兇疾の氣は、帝の熟知したる所なれば、自から顧みて、金人に敵し難きを察したるなるべし。已にして、金人大舉南侵し、帝を追ふて、海に沿ひて明州(今の寧波)に至り、別に隆裕皇太后(哲宗の后)を追ふて、南嶺に近く阜口(今の江西省萬安縣の西南(一に造口ともいへり))に至りぬ。速に金人を避けずんば、則ち相共に俘虜とならんのみ。君は自から保たず、臣は君を保つ能はず、震ひ恐れて安き心もなかりしは、是れ尋常人の習ひなり、强硬の言論を以て之れを激勵すと

も何の効かあらん。

宋の靖康の禍は、晉の永嘉（西晉の永嘉五年匈奴洛陽を陷れ懐帝を捕へ去りぬ）と等しくして、其の形勢は相異れり。晉の懐帝・愍帝は胡人に捕へられたれども、東晉の元帝猶ほ自立するを得たり。外よりして之れを言へば、晉の惠帝の末年、五胡北方に爭ひ起り、騒亂已に極まりぬといへども、爭ひ起てるもの一に非ず、互に相禁制して、晉を滅ぼさんとする志を果さゞりしに、女眞の勢は一統せられ、爲さんと欲して何の顧慮する所なかりしなり。内よりして之れを言へば、江南の地は固と是れ荆・湘・襄・漢（概して今の湖北湖南二省地方）の地と相待ち相倚るべきものにして、晉代には劉宏（劉弘）は夙に一方面を鎮撫し（劉宏は今の湖北湖南方面を治めて晉の爲めに功績を立てたる人）財政軍政を左右して掣肘せらるゝ所なく顧陸・周・賀の諸大族は、三國の孫氏の時以來、三吳（所謂江南にして概して今の江蘇浙江地方）の人望を收め居たりしが、皆共に瑯琊王（東晉の元帝）に歸して誠を盡くし、王氏の一族も、擧つて來り扶けたり。之れに反して、宋は土地廣しと雖、之れを安撫すべき人物なく、轉運使（宋初の轉運使は專ら地方の糧餉を管理するものなりしが後には一地方の民政財政軍政を總監する大任を負ふに至れり）あれども、唯官に寄食するが如くにて、安逸を貪り、民之れと親まず、而して一兵の集むべきなく、一粟の支ふべきなし。高宗は、眉を擧げ目を揚げて顧るとも、一二議論の臣が身邊に在るの外一夕の安をさへ謀るに足るべき人なし。苗傅・劉正彦の如き瑣々たる小人が恣ままに、恨を懐きて、遽に高宗の位を奪つて之れを寺院に幽したることあり（建炎三年苗傅・劉正彦の二人亂を爲し強て高宗をして位を三歳未滿の皇子に禪らしめ顯寧寺を睿聖宮と名づけて高宗をこゝに居らしむ幾ばくもなく勤王の兵來り集まり二兇誅せられて高宗位に復しぬ）劉光世・韓世忠の諸將は、大江のほとりに行動しつゝ、細心の用意を缺きて、主君を防衛するの任を完うする能はざりき（建炎三年金軍に屯し韓世忠は鎮江（今の江蘇省丹徒縣にして蕪鎮江府）を守りて金軍に備へしが敵の渡江を支ふること能はざりき）命世の英傑にあらざるよりは、此くの如き孤立の地に立ちて、悲憤の念を懐くとも、運命の絲を續ぐ望みなけん。たとへ東晉の元帝をして、是の地位に立たしむるとも、其の身俘虜となるの危險目前に迫れるを憂へざらんや。高宗が、身を風浪に任せて壯志なく、諸臣高論するのみにて志操常に定まらざりしは、勢正に然るべき所なり。

かくて知りぬ、國の一敗して支ふべからざるに至るは、惟だ孤立すればなり。漢の高祖は、項羽と戰つて泗水に敗れしも、蕭何が關中に居るを賴むを得たり、後漢の鄧禹は、赤眉の賊と戰つて長安に敗れたれど、寇恂の河内に居るを賴みて、復

び衆を集むるを得たり。崛起する者は、大抵是の如し。唐室の如きは屢〻傾かんとしたれども、朔方には頼るべき士卒あり、江淮には用ふべき財賦あり、儲蓄裕にして任ずべき人に乏しからざりしは、正に一朝一夕の故にあらずと知るべし。

宋は、九州を包有し、北に狡夷を控え、西に叛寇を禦ぎ、而して州には安撫に任ずべき臣なく、郡には和平を保つべき長なく、軍隊は罪人を收容し、租稅は内帑の私有となり、地方の官吏は、僥倖に由て官に就き、輕薄に官を去つて顧みず。かくて一旦傾覆の悲運に會へば、人々身を隱す所もなく、大江のほとり、瀕海の地に縮まりて僅に餘命を保つに過ぎず。高宗が九子僅存の身を以て（高宗は徽宗の第九子なり春秋の世に晉の獻公九子ありしが文公獨り存して晉國を興復したりし事南宋の高宗に似たり）宋の一縷の運命を繫ぎ、徽宗・欽宗の二帝に隨つて燕山に囚死せざるを得たるは、唯僥倖といふべく、陳東・歐陽澈が如何に慷慨の論を吐きたりとて當時の危機を救ふに由なかりしなり。傳に曰く、周之東遷、晉鄭焉依（レル）と、是れ必ず依賴する所あるべきを謂へるなり。詩に曰く、池之竭矣（フキタルヤ）、不云（ヨルト）自（ヨリ）頻（チニ）と、池の周邊の水久しく枯れて、中央に一勺の水を存し、是の水一たび涸るれば又餘す所なし。宋代通判の官を諸州に置き、以て節度使の兵權を奪ひてより、大臣の出でて州郡を典るものは、考朽の故か、然らずんば則ち左遷なりき。されば富饒の江南といひ、巖險の巴蜀といひ、扼要の荆襄といひ、樞要の淮徐といひ、何處にも有爲の人材なく、唯官服の美を飾りて、閑散の日を送れるのみ。其の中、賢き者は、宮牆を建てゝ道を論じ、其の次は亭榭を飾りて逸遊を事とし、其の下なる者は、民財を掠めて自から肥やせり。天子は、却て之れに心を安んじ、彼等不肖なりと雖、各〻奮起して吾が帝位を覬ふに至らざるを幸とすと謂へり。かくの如き狀況にては、東晉の元帝が凡庸柔弱の身を以て、宗社の命脈を延べ、江淮の民をして胡族の手に陷るを免かれしめたるが如きを求めんとするさへ困難なるにあらずや。故に逃げ走るを安しとなし、和を求むるを幸とすべき道理にて、偏に高宗をのみ責むべからざるなり。

されど其の後、宋は全く絶望の域に陷りしには非ず。張浚が川陝地方を（今の四川陝西二省方面）宣撫し、便宜黜陟を行ひ得べき許可を得るに至つて、前途の光明稍〻開け、宋は西方に倚るべきの地を得んとしつゝありき（高宗建炎三年張浚は川陝宣撫使に任ぜられ便宜を以て自由に黜陟を行ふを許さる張浚の意圖は川陝を金人に奪はるればおのづから江淮地方を脅かさるゝに至るべし今先づ川陝方面を確實に掌握して之れを根據として挽回を圖らんと謂ふに在り）朝廷よ

り掣肘せらるゝこと緩ければ、事に當る者も皆奮勵すべき筈なり。かくて張浚韓世忠・岳飛・劉錡の諸將大に勇み、群盜を討平して之れを部下の兵に加へ、宋は用ふるに足るべき兵を有するに至れり。足を縛せられずんば其の身倒れず、枝を伐られずんば其の根槁れざる理なり。されば、秦檜が忠良の臣を迫害したる後金帝亮南侵して大江に臨みたる時に當つても、高宗は前日の如く駭き走ることなく、却つて親征の詔を下す程の勇氣を示せり。前日の場合と雖、威望の重臣ありて、江淮を鎭守して高宗の至るを待たしめたらんには、必ずしも彼時の如く意氣消沈の甚だしきに至らざりしならん。

宋初の政策を立てたる者は、朝廷の權力を確保するが爲めに、天下の弱からざらん事を恐れたるに似たり。爾後の君主は、地方の政治緩怠に流るゝを目して却て朝廷の安泰の爲めに幸なりとなせり。かくて國已に蹙まり、寇已に深く、侵入せる時に至つて、無能の民戰を爭ひ和を爭ひ、國家深憂の中に在つて徒らに空論を鬪はせ、一人として諸路勤王の兵の潰散を叱責し、勢力を挽回して朝廷の外援を爲さんとするものなかりしは、實に宋朝の政策が自から招きたる禍なり。

宋は初めより孤立したるに非ず、之れをして孤立するに至らしめたるは、猜疑の家法なり。天子の身を以て州郡の權を爭ひ、全盛なるべくして實は貧寡の勢をつくり、危きに瀕しつゝ、輔車の援を求めざりき。稍、自から樹立するに及んで秦檜又此の家法を以て高宗を惑はし、再び屈辱の和議を結びたりしは、依然として畢士安の策を學びたるものなり（畢士安は寇準と相竝んで眞宗の宰相たりし人なり當時契丹入寇し寇準は强硬なる主戰論を持し畢士安は平和の解決を希へり眞宗遂におのれを屈して契丹と和しぬ）岳飛誅せられて死し、韓世忠罷められ、之れに繼ぐべき人物なく、軍將は文吏の命を仰ぐに至りしは、依然として趙普の心を宗としたるものなり（趙普は太祖の宰相にして軍將の兵權を奪ひ之れを朝廷に收めんことを圖れり）後に宋亡びて、中原全く蒙古の有となりしは、宋が自から中原を棄てたるに同じく、天の寵兒たる蒙古と雖、向ひ近づく可からざる程のものに非ざりしなり。

依賴すべき藩屏あらしめば、高宗といへども、唐の肅宗が安祿山・史思明の大亂を平らげたる程の功業を建て得たりしならん。猜忌の家法なくんば、高宗も猶ほ唐の德宗が李晟を任用したるが如くなるを得たりしならん。故に千萬世に亙つて中夏の防衛を破壞せるものは、宋の太祖の宰相趙普なり。宋の太祖の明

智を以てしても、趙普に說破せられて、深く其の言を信じたり、況んや後の深宮は養はれ小弱の身を以て四海に君臨せる者をや。後漢の光武帝が、漢の高祖が功臣を忌みて之れを誅夷したるを師とせざりしが如き卓見は、明智の人にして之れを能くすべく、中材以下の人に向つて之れを期待すべからざるなり。

第三節　高宗が亡國の危機を脫し得たる所以

小序　高宗の建炎三年、金將兀朮大兵を擧げて深く侵入し、高宗狼狽して海上に逃れ、宋の運命危殆に瀕したりしが、翌年金軍北に歸り、高宗復た江淮地方を保つを得たり。本論の要旨は金軍が侵地を放棄して北に去りしは、宋人の中に有力なる內應者を得ざりしが故にして、此の內應者なかりし事は、宋の立國以來、臣下を制馭するの家法寬嚴宜しきを得たるに本づき、高宗も、是の家法の餘德に由りて亡國の不幸を免れしなりと謂ふに在り。

金將兀朮、江を渡つて南するや、吳會（大江以南今の江蘇浙江の地なり後漢の時此の地方に吳郡と會稽郡とを置けり其の古名に因つて吳會といへり）を席卷し、高宗を四明（今の寧波）に追ひ、東の方海濱に及べり。其の別將は、宋の隆裕皇太后を追ふて、南は虔州の阜口に至り、西は楚彊（今の湖南湖北地方）を掠めて、岳州・潭洲を陷れ、武昌も其の攻略に任せたり。是時に當つて、江南糜爛し、宋は一城の恃むべきなく、韓世忠・岳飛は無益の地を守りて、抗敵の用を爲さゞりき。前秦の苻堅が東晉を擊ちし時も、亦後魏の拓跋佛狸（太武帝）が宋を攻めし時にも、此くの如き好機會に乘ずること能はざりしなり。されば女眞は、當時已に宋の天下を併呑すべき勢にして、後日蒙古が來つて宋を滅ぼすを待たざりし程なり。然るに惟しむべし、金將兀朮は、河を渡つて北歸するに急にして、宋の高宗は、又もや淮水を界として國を守るを得たり。是れを以て、國家安危の機は、一朝一夕の故にあらざるを知るべきなり。

女眞は、深く侵入しつゝ、然かも久しく江東に處る能はず、心中恐れを懷きて、夢寢安んぜざる所あるが如くなりき。是れ、已に欲に厭きたるが故にあらず、又恃むべき力足らざりしが故にもあらず、女眞が攻むるに餘ありて守るに力足らざりしは、興黨とすべき者なかりしが故なり。宋の杜充が建康城を守つて金軍に降りしは、兀朮の興黨を得たるものなるに似たり。されど杜充の如きは顧るに足らず、彼れ獨り身を脫して金に降り、號令衆に及ぶ能はざりしかば、女眞も、かく

の如き人物に依賴して江淮地方を占有する能はざるべきを熟知したるなり。深く敵地に入り、其のまゝ之れを占有し得るといふには、必ず大衆を擁して來り降り、已れに代つて敵人を招集すべき有力者の助力を待たざるべからず。故に後日、劉整呂文煥が蒙古に降り、蒙古の先導をなしたるに因りて、宋は土崩の不幸を免るゝ能はざるに至れり。地其の地にあらず、人其の人にあらず、風土の剛柔山川の險易人心の向背の如き、卒然敵地を履みたるばかりにては、之れを詳にする能はざる筈なれば、安んぞ能く孤軍敵中に在りて、守令を設け、芻糧を求め、困難の憂無きまでに至るを得んや。師行くこと千里にして敵を見ざるものは、心必ず危ぶむものなり。唯烏合の降人を得て、之れに敵人安撫の任を托するを得ずとせば、かくの如き降人を固く信用し得ざる道理なり。されば金將兀朮が、戰に勝ちながら心中に懼れを懷き、地を得ながら占有の功を完うすること能はざりしも、實に必然の理ありといふべし。

夫れ宋が天下を有してより、國内の動搖絶ゆることなかりしに、然かも將帥牧守、相持して女眞の用を爲すこと無かりしは、固とに其の故あるなり。宋朝の士大夫に對するや、離畔の心ありと雖、誅夷を加へず鞭笞だも施さず、其の家法堅く定まり、姦邪の徒專横なるに方りても、天子之れに動かされて家法を紊すに至らず、從つて姦邪の輩も自から抑へて凶手を振ふと能はざりき。宋朝の武臣に對するや、之れを猜防して勇略を展べしめざりしが爲めに、國弱かりしと雖、然かも有功の者を故さらに挫抑すること無く、過ありても深く之れを追窮せんとはせず、危困に陷れるものを無情に放棄することなく、敗北しても按誅を加ふることなかりき。武臣を遇すること厚くして、然かも之れを馭するに成規あり、即ち武臣をして、部曲を擅有し去就を恣にするが如き事なからしめ、又寇敵の存在を幸として權寵を貪るが如きこと無からしめたり。先づ嚴を示して、後に之れを抑へたれば、人々深き怨みを懷かず、抑ふるとも極端に走らずして、寛待を加へたれば、人々不平の心を蓄へず、かくて武臣は猶ほ君に媚ぶるの念あり、部曲も逆に從つて靡くに至らざりき。されば天下の大勢、十に八九を去れる危機に際しても、士心協ひ、民心定まり、軍情猶ほ固かりしは、百餘年一日の如く一貫したる宋の立國の精神の然からしむる所にして、危機に瀕しても、依然として變ること無か

りしなり。

史嵩之・賈似道起るに至りて、盡く祖宗の成法を毀ち、宋帝理宗は軟弱にして之れを責めず、士心始て離れ、民心始て散し、將帥兵を擅にして存亡の大事を主どり而して皇帝は與かり知らざるに至れり。かくて宋は風を望んで瓦解し、蒙古安驅して入侵し、天下を撫拾すること烏を弄ぶが如く、晏然として何の疑ふ所もなし。然らずんば、劉整・呂文煥の輩が蒙古に降りたりとて、安んぞ我が多年豢養せる吏士をして、敵前に於て内爭を起さしめ、樂んで狡夷蒙古に歸附すること其の父兄に對するが如くならしむるを得んや。

斬刈急なれば小人激し易く、鞭笞用ふれば君子亦離る。部曲衆多にして封賞早くんば、武臣の去就自から恣なるべく、孤軍危きに陷りて之れに應援を與へずんば、武臣怨みて反噬必ず深かるべし。上たる者、下に在る者と背馳して相知らずんば、敵は容易に下に在る者を收集して、反つて吾が腹心の患たらしむるなるべし。宋の亂政は、蔡京が政を執り童貫が軍を率ゐるに及んで、其の極に達せりされど上述の弊害なほ未だ甚だしきに至らざりしかば、高宗も危きを脱して海に航し、終に亡びざるを得たりしなり。

第四節　南宋諸將の群盜利用策

小序　王船山は、前に將軍宗澤の群盜利用を論じたるが、今又、南宋初世の諸將が巧みに群盜を利用したる所以を說き、其の利用法につきての意見を陳べ、賊衆を利用するは可なり、其の巨魁を利用するは不可なる旨を示せり。

紹興（高宗の年號）の諸大帥が用ひたる兵は、皆群盜の降れるものなり。高宗渡江以後弱甚しかりき。張浚・岳飛招討の命を受け、韓世忠・劉錡之れに繼ぎぬ。是に於て、范汝爲・郝青・曹成・楊么の衆皆降りて軍に加はり、軍勢復た振ひ、劉豫を走らせ、女眞を破り、人心の動搖漸く定まれり。

蓋し群盜は、寒暑に耐え、兵刃に觸れ、之れに慣れて驚かず、甲仗具はり、部隊分れ之れを常として人に待つ所なし、故に用ふるに足るなり。然らずんば、江南の廂軍（宋の諸州の鎭兵なり）の配囚（即ち配軍なり流刑に因りて邊地を守備する者）の如き脆弱の衆をば、如何に多く用ひたりとて、北方の巨寇を防ぎ兼ねたるなるべし。

之れを古今に考ふるに、群盗を用ふるは、大利大害の分るゝ所なり、之れを受け容るゝにも時宜を圖り、之れを利用するにも其の手段を考慮するを要す。光武帝は、銅馬の賊を攻めて帝となり、曹操は黄巾の賊を併せて強く、唐の昭宗は朱溫（朱全忠なり大員黄巢の部下より立身せるもの）を用ひて亡び、宋の理宗は、李全（初め賊となり寧宗の時歸順し理宗の時また叛けり）を撫して不利を招けり、盗は固とに輕々しく用ふ可からざるなり。

受くる者弱くして盗强からんには、客は主を侮り、受くる者强く盗も亦强からんには、内心互に相疑ひて相和せず、受くる者强く盗弱くして、威信こゝに生ず。故なくして來歸するは詐なり、彼れに挫けて此れに歸するは、賴むに足らず、名は歸順と稱して其の實なければ、乍ち合して終に離るゝなるべし。故に群盗を招撫せんと欲する者は、先づ之れを討伐す、而して群盗の降らんと欲するものも亦先づ一たび勝つて服從し、已に我れの部曲となると雖、猶ほ强弱を角して我れと主客の權を爭はんとするなり。

唐が朱溫を受け、宋が李全を容れたるに當つて、朝廷は自から强きを恃む所なかりしが故に、朱溫といひ、李全といひ、朝廷を睥睨して逆に之れを抑へ、揚々として自得の色あり、而して朝廷は之れを制するに由なかりしなり。紹興の諸將は能く此の消息に通じ居たれば、一舉に力を用ひて、先づ群盗を擊破すること再三に及びて之れを制壓し、群盗は唯〻我れを畏るゝのみならず、我れを恃んで主となし、我れに賴つて敗滅の憂を免かるゝを得べきを信ずるに至れり。是れ群盗を受容するにつきての權謀なり。

群盗を利用するにつきては、可用と不可用とを辨別すること緊要なり。均しく盗なりといふが中に、其の長たる者は、大衆を擁するを恃んで自大の心あり。彼れ歸順して後、高位を授けられて衆を統べ、心益〻傲り、天子の尊きを以て彼れを控制せんとするも、彼れに誠意なければ、天子の尊も其の效なかるべし　盗酋の去來順逆は、一に高位を貪るに因ることなれば、たとへ我れに來歸すといひても天子は招撫の虛名を擁するのみにて、元帥たる盗酋は、唯裝飾の用をなすに過ぎざるのみ、加ふるに或は敵に降りて我れを敵に賣らんとし、或は我れに代つて興らんとの陰謀を蓄ふるものあり。我れと協力同心して我が爲めに死力を盡さんことは、到底彼等に對して望むべからざる所なり。されば、盗は用ふべきも其

の長たるものは用ふべからずといふなり。

更に進んで、全然用ふべからざる要件あり、卽ち群盜をして我れに心服せしむるとも彼等に對して成功を期待す可からざる事是れなり。群盜の起りを考ふるに彼等みな甲乙なき同輩にして、初より定まれる主といふものなく、人々或る一人を推して長となすとはいへ、是の一人の力を以てして、傲慢の賊衆を操縱して離れざらしめんこと難し。彼れ盜術に巧なるが故に部衆に服從せらるゝならんも、其の術たるや、天下を經略するに足るものにあらず。彼れ智勇人に過ぐるにあらずして、然かも戰て勝たざるなく、敗を憂へず、走るを恥ぢず、易々として去就の態度を豹變す。進むに方つては掠奪を務め、敵す可からざるを知れば急に退き去り、進退共に部衆を保全するを圖る。地を得るとも之れを固守する意なくして、巧に危地を避け、一戰して再戰を求めず、以て勞疲を省き、盜掠を旨として部衆を全うするを求め、必ず成功を期せんとはせざるなり。是に於て、不幸亂離の地に徘徊し、山川の險固に據りて自から守り、部下をして誅戮を免かれしめ且つ隨意に掠奪するの利益を占む。かくて無智の愚衆は、喜んで此の如き者を推戴して尊しとなすなり。されば、群盜に托して極力敵に抗せしめ、身命を擲つて功を立てしめんと欲するが如きは、必ず失敗に了るものなり。彼等は、敗れて走り、勝ちても走り、其の走る所は一として掠めざるはなし。甚だしきは、國家の傾危を坐視し、之れに乘じて利を收め、或は叛き、或は位を奪ふものあり。是れ彼等の志行、常なきを習ひとし、之れに慣れて毫も意とせざるに因る。威を以て畏れしむるに足らず、恩を以て懷くるを得ざる難物なれば、唯唐の昭宗・宋の理宗が之れを馭し得ざりしのみならず、後漢の光武帝の如き英傑たりとも、群盜の頑詭を改心せさせ、身命を捧げて我れに事へさせんこと全く難かるべし。

故に光武帝は、赤眉の賊酋の來り降れる時、卿は鐵中の錚々たるものといふべしと言ひて、之れを寬容して殺さゞりしのみ、曹操は、黃巾の賊衆を收容したれども、之れに一方の將帥たる任を授けざりき。朱溫・李全の如きは、歸附して後も、依然として部曲を擁し、屹然として巨鎭となり、進んでは敗れ、退きては逆を謀れり是れ盜魁たる者の習性にして終に改むる能はざるなり。

紹興の諸將は、群盜を用ひたれども其の巨魁を棄てたり。張用・曹成・黃佐は僅

に生命を全うするを得、范汝爲楊么は皆斬首せられ李成・劉忠寧は、其の北に走つて女眞の附庸たる劉豫に降るに任せて之を收容せざりき。是れ、根已に拔かれて枝自から靡き、垢已に洗はれて色白から新なるに同じ。かくて我が欲するまに盜衆を指揮し、之れを戰陣に利用して、成功を收むるを得たり。宋が江淮を撫有して、數世の安泰を遺したる所以こゝに存す。盜賊掃蕩すれば民力裕かとなり戰勝頻なれば士氣振ひ、大惡誅せらるれば叛逆の徒自から警め、部曲衆ければ配備周密となり、統率一手に出づれば進退一決す。かくて劉豫を走らせ、兀朮を挫き、而して淮水・汴水の方面に戰つて勝てり。後日に及び、金帝完顏亮大舉南侵せし時、大江を目前に望みながら、之れを渡つて志を遂しうする能はざりしはひとへに南宋諸將が決然盜群を滅ぼして之を利用したるの功に歸すべきなり高宗の志變ぜず秦檜の姦行はれざりしならば、宋は必ず復た興りしならむ。

第五節　南宋の河北經略は不可能なり

小序　南宋の初世に於て、金人屢〻南侵したりしかど、遂に江南を覆へす能はざりき。南宋の紹興年間、張俊・韓世忠・岳飛・劉錡の諸將、力戰して逆に金を伐ち、紹興十年には、岳飛は北進して、汴京の西南に近き朱仙鎭に至り、南宋新興の勢大に望みを囑すべかりしに、秦檜和議を唱へて諸將の行動を束縛し、北進の勢頓挫したり。王船山は、當時の南北の形勢を熟察し、宋軍が鋭意北進して、一擧に河北を經略し、金人を驅逐せんこと、實は不可能なりきと論斷せり。

南宋の全力を擧げ、名將岳飛をして自由に行動せしめ、助くるに韓世忠・劉錡・吳玠・吳璘の諸將を以てしたらんには、汴京を奪回し、陝西の地を占有するを得たりしならんか。曰く可能なり。是れに由つて、黃河を超えて北方に進みたらんには、曾て石晉が契丹に割讓したる燕雲十六州の地を奪回して、女眞を塞外に驅逐するの望みあり、其れ程に成功せずとも、三關（益津關・淤口關・瓦橋關にして今の天津附近より西へ雄縣に至る間に在りき）に據りて、東は滄州・瀛州を有し、西は太原を保ちて、北宋の舊領に仍るを得たりしならんか。曰く、是れ不可能なり。

凡そ得失成否の形勢は、敵について其の情を察し、我れに顧みて勢を審にせざるべからず、唯〻力の强弱に由つて之れを判じ難し。敵にして必爭の情あらば

力弱しと雖、未だ奪ふべからず、強ければ論なきのみ。我が勢にして便ならざる所あらば、力強しと雖未だ恃むべからず、弱ければ論なきのみ。

先づ河南・陝西に就きて之れを論ぜんか。女眞の初て起れるや、契丹に對して積怨を洩らさんと欲したるなり、既に勝て還り、更に契丹所有の燕雲を奪ふて止まんとを思へり。燕を得るに及んでは河北を望み、雲を得ては汾晉（河東卽ち山西）を窺ふ、共に臂を伸ばして容易に收め得べき所なりしかば、女眞遂に關南（瓦橋關南たり瓦橋關は黃河平地に於ける北宋と契丹の境上に在りし要衝なり）を併呑する志を起しぬ。乃ち海東を威制し、漠北を席捲し更に南に向つて燕南の地を襲ひ取り、併呑忽ち數千里に及びしが、其の侵地は女眞の本據を距ること遠くして、之れを遙制するに苦しめり。されば女眞は、虛に乘じて宋の河北・河東並に河間・中山・太原の諸要地を取れるに滿足し、それより以南、汴京・洛陽・關中・陝西など中原深奥の地方は、宋之れを守る能はずして、女眞が容易に之れを握り得たるにも係らず、あわたゞしく之れを棄てゝ、自ら有することなく、之れを張邦昌・劉豫の如き宋の叛臣に與へたりき。則ち中原の地は、女眞が必爭の地にあらざりしこと明らかなり。彼れ女眞が、宋の岳飛の爲めに朱仙鎭（汴京の西南）のに擊破せられ、甲を捲いて逃れんとしたるは、たゞ其の力足らざりしが故にあらず、占有の念なかりしが爲めなり。而して宋は群盜を收用してより後、諸將發奮して東西より夾進し、東は淮水泗水方面を平らげ、故都汴京附近に及び、進んで席捲するの機に會し、西は秦州・鳳翔方面を扼して長安に向はんとし、是れ亦建瓴の勢ありき。岳飛は中央より銳進し、東西と連繫しながらも己れの孤立を意とせず、金將兀朮を走らせ、故都汴京を取り、黃河に據つて守るに至れり。新興の强勢此の如く沛然として意の如くならざるはなかりき。故に、汴京を奪回し陝西を占有するは必ず可能なりと謂へるなり。

次に河北・燕南につきて之れを論ぜんか。女眞が宋との妥協を破りて後、其の地未だ女眞の手に入らずして、定主なき動搖の狀態に在りしが、元來、燕南・河北の地方は、燕の外衛とすべく、芻糧・金帛を徵發し得べく、又其人馬を收用して勢を强うし得べかりしが、宋に叛きて女眞に降れる郭藥師が女眞を誘導するに及びて女眞は垂涎して其利を羨望するに至り、是れより永く必爭の地とはなりぬ。かくて女眞は宋と戰を交へ、軍屢〻敗れたれども、宿將未だ凋落せずして餘威なほ振

へり。宋軍をして、勝に乘じ黃河を渡つて北に進ましめなば、女眞は悉く海東の勇士を舉げ、死を決して抵抗を試みるなるべし。然る上は、宋軍は背は黃河に阻まれ、前は强敵に遮ぎられ、十に八九は覆滅の不幸を免かれざるなるべし。

宋の諸將は、位といひ權といひ、力といひ功といひ、著るしき差等なかりき。岳飛が少年にして崛起し、元帥の任を授けられざりしは、張俊が古參の主將にして中より妨害を加へたるが故なり。韓世忠・劉錡・吳玠・吳璘なども、いかでか身を屈して岳飛の指麾を受くるに甘んずべき。諸將いづれも隨意に進退して之れを統裁するもの無く、功罪ともに明確なる責任者なき有樣なり。戰國の時、五國合從の師は、秦を攻めて函谷關に敗れ、後漢の末、山東の豪傑競ひ起つて董卓を討ちたれども、充州豫州の地方に戰つて克たず、唐の世に、九節度使の軍を合せて安慶緒を伐ちたれども、其の軍河南に潰えたるが如きは、皆行動の統一を缺きたればなり。之れを東晉の劉裕が、孤軍直進して、後秦王姚泓を擒し、南燕王慕容超を俘にしたる成功に比較すれば、我が軍の一致すると一致せざるとは、直ちに敵に對する成功と不成功との分るゝ所以なるを知るべく、是れ古今一貫の眞理なり。

一致せざる我が軍を合して、決死の敵に抗し、百戰練磨の驕虜に當りて、全然之れを制壓し了らんと欲するも、得て望むべからず。かくの如く協同を缺けるに於ては、高宗に疑惧の心なく、秦檜が腹心の害を爲すことなく、張俊・劉光世が旁より新進の英傑を沮害するが如き事なしとするも、必ずや陳の吳明徹の轍を踐んで淮北を棄て、退いて河南をすら保ち難き不幸に陷れるなるべし。然るを勝に乘じて、遙に黃龍（東晉の世に鮮卑民族より起りし慕容燕の國都を黃龍といひ一に和龍とも稱し今の東部內蒙古の朝陽縣附近に在りき又元と女眞に對する契丹の東北境の要地に黃龍府といへる所あり今の滿洲吉林省農安縣附近に在りき本文に遙指黃龍といへるは右二ケ所のいづれを指したるにもあれ要するに深く敵地に侵入する意なり）を指して深く敵地に入り、凱旋授賞の祝盃を擧げんことを期するは、唯だ口に言ふべくして、實際の成功を冀ふ能はざるものなり。

故に易に、殷の高宗が鬼方を伐ちたるを書したるは、其の遂行の難きを憂へたるなり。春秋に曲沃が翼を伐つて陘亭（陘庭とも書す）に次したるを許せるは、其の止まるべきを至當としたればなり。宋初に趙普が曹翰の北伐の策を沮みてより、燕雲十六州を恢復するの途を失へり。徽宗が郭藥師をして宋に叛かしむるが如き失策を敢てしより、河北の地は宋の手を離るゝに至れり。諸將をして意の如

く軍事行動を執らしめ、姦人の和議を斥け、敵が爭はんと欲せざる所を棄て、敵が防ぐに困難なりと思はるゝ所を攻め、東は徐州兗州を收め、西は關中隴西を收め汴京洛陽の中原の地を外方より監視して之れに手を觸るゝ事なく、永く此の姿勢を保ちて英主の出づるを待ち、完顏氏（金帝室）の蔡州に亡びて蒙古の害毒四海に流るゝが如き事なからしむるは、猶ほ成功の望なきにあらねど、決して其れ以上を期待すべからず。朱仙鎭の捷に由り、勝に乘じて河を渡り、漢唐の領域を復し、數年ならずして九州全土を廓清し得んと言ふが如きは、彈を見て鴞炙を求むるに同じき大早計の謬見なりといふべし。

第六節　岳飛が禍に罹れる所以

小序　南宋の名將岳飛は、壯年を以て偉功を建てたりしが、秦檜の毒手に罹り高宗紹興十一年、三十九歲を以て殺されたり。後世の論者、岳飛の爲めに扼腕し、其の行事を壯とせざるものなきに、王船山は、岳飛が身邊の猜疑嫌忌を顧慮するとなく、餘り一徹に行動したるが爲め、遂　姦人に陷れられたるを遺憾とし、屈すべき時には屈せざるべからざる所以を說き、岳飛が是の理を考へざりしを惜みたり。

宰相にして武功を立てたるは、周公以後、吾れ未だ其の人を見ず。將帥にして令譽を求めんとするは、唐の李吉甫と雖果して能く之れに適すべきや否やを疑はざるを得ず。將帥にして令譽を得るに三途あり。軍令を嚴しくして掠奪を禁じ、溫言を以て下流の衆民を慰むれば、民に譽めらる、是れ一なり。謙讓を修め交際を謹み、文詞を習ふて相酬和すれば、士に譽めらる、是れ二なり。廷議に與かつて公論を持し、姦邪を排して君子に交はれば、公卿百官に譽めらる、是れ三なり。

岳飛の死するや、天下後世相共に憤慨し、彼れを稱揚して止まざるは、良に彼れが三途の令譽を馳せたるが故なり。さりながら、君子なほ遺憾とする所あり、岳飛が功名の際に處する態度につきて遺憾とする所あるなり。進んでは、己れの成績を以て國を利すること無く、退いては、己れの身を保つ能はず、遂に秦檜の姦に遇うて免かれざるに至りしが、秦檜の姦に遇はざりしとするも、岳飛は蓋し不幸を免かれ難かりしならん。

易に、其の身を安んじて後に動き、其の交りを定めて後に求むと言へるは、作急

に功名を獲得すべからざるを謂へるなり。況んや將帥たる者は、大衆を統べ、大權を持し大功を立て、安危存亡の大計に任ずるものなれば、身を安んじて上下の交りを定むるを求めん事、尤も容易にあらず。身安からずんば志寧んぜず、交り定まらずんば權重からず、志寧んぜず權重からずんば、己れの力を宣ぶる能はずして妨害を加ふる者生ずべし。妨害を加ふる者起れば、我が身を忘れて君父の危きを救はんと欲するも、其の事を遂ぐる能はざるに畢らんのみ、唯だ我が身不測の災難に苦しめらるゝに止まらざるなり。

君たる者有爲の人にあらずんば、群下を制するの才なく、又統御の力なからんとす。從つて當世の材人勇士は皆君を去つて我が配下に歸し、戰て敗れざるが爲めに又敵に憚らる。天下の人は、上に天子あるを忘れて、偏に我れが名聲を仰ぐに至らん。勢已に此の如し。在朝在野の人は又、われが民を恤み士に下るの美風を推稱す。我れ猶ほ此の形勢を顧慮することなく、學問にも心を寄せ、詩文を以て悲壯の感慨を陳ぶるに至れば、心なき輩は、隨喜渴仰して我れを讃歎し遂には里巷の歌に美名を謠はれて、廣く四方に傳へられ、庸主小人をして不快の念を懷かしむ。加ふるに、君の得失につけ、人の賢姦につけ、又政道の可否につけ、救の力及ばずと觀たる時は、廷臣は我れを引て援となし、我れ亦身を以て之れに當るが故に、益〻君主に忌まれ愈〻姦人に疾まるゝ次第なり。かくて、何ぞ能く身安くして國に効すを得べきや。

漢の功臣は、蕭何・張良の指示に從つて行動し、漢の絳侯・灌嬰は、武骨に甘んじて隨何・陸賈と文學の美を爭はざりき。唐の郭子儀は、身を以て國家の安危に任じたる人なりしが、李泌・崔祐甫の賢を知りたれども、之れと交はつて君子の好しみを結ばんとせず、元載・魚朝恩の惡を知りたれども、故さらに之れを排擊して姦人を怒らすことを避け、李光弼に統率の權を分つて、自から長たらんことを爭はず舊と己れの部下なりし僕固懷恩と同列に行動するを甘んじたり。かくて郭子儀は、排斥せられたるにも係らず、一旦躍り起つて、卒に吐蕃入寇の大難を救へりかくてこそ、其の行動有利ならざることなく、求むる所一として求め得ざるはなかりしなれ。

岳飛は、身を以て天下に任ずる志あり、以て趙氏(宋朝)の國家を靖んぜんと欲し

たるに、是の理を思はざりしは何ぞや。宋朝が武臣を猜防せる由來已に久し。高宗は、苗傅・劉正彦の爲めに位を廢せられてより、益〻武臣を疑ひ、其の心中察するに難からず。張浚の褊狹にして定見なきは、其の心已に其の言辭に現はる。張俊・劉光世は、故參先達なるが故に、岳飛に屈する能はずして、自から反目を生じたり。秦檜の陰險なるは言語を以て爭ふべからず、名義破れて、其の勢已に堅し。かくの如き難局に際して、岳飛は紀律を明張し、溫容を以て民衆に歡迎せられ、文采を示して普く文士と交はり、張九成等と相親しめり。諫臣と心を合せて和議の非を辨じたり。嚴然たる態度を持して、剛正を標榜し、姦臣に屈せざる勢を成せり。張俊を譏評し、群將を歷詆し、以て張浚の辨を挫き、凡そ宰執臺諫館閣守令の爲すべき責務を一身に負へるが如くにして、諸人の讚頌を博せり。かくて、軍士衆民共に心を岳飛に寄せ、游士墨客清流名宿の徒までも之れを稱揚せざるはなかりき。其の定交盛なりしも、唯だ天子の心を得る能はざりき。其の身を立つること卓越なりしも、其の身已に危きを知らざりしなり。

嗚呼得失成敗の樞機は、屈伸の間に在るのみ。之れに屈するものは彼れに伸ぶる理にて、一舉兩得の數なく、又屈と伸と相反せざる勢なきなり。故に文武用を異にすれども、歸する所は相同じく、屈すべくして屈するものは、伸ぶるに方つて伸び、强て之れを求むるを要せず。故に進退常なくして、却て善く活動の妙を得るものなり。

岳飛禍を受くる時、身尙未だ老いず、謙退して衆美の聲名を避け、難局を知つて勇退し、旦夕の功を爭ふこと無からしめば、固とに秦檜の死を待ち得たるなるべく、或は金帝完顏亮の背盟南侵の頃までも生存するを得たりしならん。然る上は、高宗の君臣が社稷を擧げて一々我が言を聽かんこと必定なるべく、從つて岳飛の壯志伸ぶるを得ん。韓世忠・劉錡・吳玠・吳璘の諸將も、人事意の如くならざるに屈せずして、なほ餘威を蓄へ、女眞の內亂に乘じて其の北歸の軍を追擊せば、大河以南を席捲するに難からず、根底より北敵を覆へし以て中原を靖んずる能はざるまでも、何ぞ日に疲れ月に削られて滅亡に終るが如きに至らんや。

故に君子は、岳飛が安身定交の道を失へるを惜み、殊に岳飛を譽めたる者が岳飛を殺せるに同じき結果に陷れるを恨みとするものなり。悠々たる頌德の歌

が却て姦人の誹謗を招きたること、眞に畏るべきなり。而して畏るべきを知れば、則ち又必ず之れを避くる所以の道あるにあらずや。

第七節　義兵の可否と岳飛の班師

小序　南宋高宗の紹興十年、岳飛の軍北に進みて、金軍を郾城に破り、次で朱仙鎭に達しぬ。時に太行山方面の義兵起つて、岳飛に應じ、岳飛の部將梁興は黃河以北に出でて、義兵に會し、金軍を垣曲・沁水に破れり。然るに岳飛は、秦檜に沮まれて師を班へし、義兵遂に振はずして散じぬ。王船山之れを論じて、義兵なるものは初より恃むべからず、岳飛の班師は、却て宋軍の潰敗を救ひたるに同じと謂へり。

岳鵬舉（岳飛字は鵬舉）金軍と戰つて郾城に捷つや、太行山方面の忠義社竝に河北河東の豪傑、乃至衞・相・汾・晉の諸州、みな日を期して兵を興し、以て北伐に參與せんとしき。秦檜詔を矯めて軍を還へさしめ、事成らざりき。然らば則ち、秦檜が中より沮むことなくんば、此の競起の衆を率ゐて河北に長驅し得たる可きや。曰く、岳飛の屢勝の兵及び劉錡・韓世忠・吳璘・吳玠の諸將が、相竝んで敵に抗するを望み得べきも、所謂豪傑義社なるものは、固より無能ならんのみ。何を以て其の然るを明らかにするか。

義兵の興れるは、王莽を討ちたる翟義に始まる。之れに嗣では、則天武后を討ちし徐敬業あり。其志は嘉すべきも、其成敗は能く人の知れるが如くなり。故に大略を定め大難に克ち、大敵を摧き大功を成す者は、義兵を恃まざるなり。

夫れ人を恃むものは、恃む必要を感ずること切なればなり。恃みとする者もの己れより强からんか、則ちこれ己れ固とに弱きなり。己れ弱くして人を恃めば絕えず人に賴りて志堅からず。弱者主となり、强者客となり、敵は弱者を攻めて主たるもの潰え、强者たる客は主を失ひて駭散し、强の用を爲さずして己れを救ふ能はざるべし。恃みとする者、己れより弱からんか、弱者は固とより恃む可からず。己れ弱からざるに、猶ほ弱者を引いて自から輔くるとせば、弱者は敵に勝つ能はず、敵一たび之れに當つて弱者忽ち靡けば、吾が勢先づ挫けて三軍の士氣沮喪し、敵人の士氣勝つて益〻加はるべく、己れのみ强しと雖、氣勝たずして必ず傾くなるべし。大略を定め大難に克ち、大敵を摧き大功を成す程のものは、敵と

相擊つの力あり、敵に乘ずるの智あり、敵を畏れしむるの氣あり。一は一と相當り、死ありて生なく、進むを知つて退かず、上は天時を恃まず、下は地利を恃まずして、勝を白刃の下に決すべし、復た何をか恃むべけんや。況や義兵なるものは尤も恃むに足らざるものなるをや。

義軍の興るや、故國の淪亡を痛み、衣冠の滅裂を悲み、生民の塗炭を念ひ、惻怛の情心中に發して、吾が九族の慘狀に陷るを惜まずといふ者は、數人のみ。義の名を聞き、之れを羨んで起るものあり。功の成るを希ひ、得る所あるを望むものあり。其次には、變動を好むの民、事ありるを喜び、無意義に興るものあり。其次には掠奪を僥倖して之れに乘じて利を圖るものあり。又其次には、弱くして自立し難く、衆に迫られて止むを得ず興るものあり。又其次には、被役の徒奴僕の輩など主公の命を奉じて免がるゝ能はざるものもあるなり。名は萬人と號しても實は其の半に達せず、實に萬人ありとしても、戰ひ得る者は、其半にも上らず。戰ひ得るもの千人ありとしても、勝敗に由つて輕々しく進退せざるほどの者は百人を得ざるなり。軍令を以て之れを整齊せざれば、游散常なく、芻糧を供給せざれば、掠奪を恣にす。游散常なければ、敵來るとも覺らず、掠奪を恣にすれば、民怨んで反抗す。故に王莽・則天武后の誅し易かりしに方つても、翟義・徐敬業は忽ち起つて忽ち仆れたり。況や女眞の慓悍にして當り易からざるに於てをや。

岳飛の部將梁興が、黃河を渡り義兵を率ゐて、垣曲・沁水に戰つて捷ちたりしは勝つに足る力ありしにあらず。義軍は皆自から岳飛の軍なりと假稱し、梁興往て之れが聲援を爲したるなれば、女眞人は其眞僞を辨ぜずして震動したりしなり。垣曲・沁水を守りたる敵は、初に女眞に降れる河北人の餘黨に過ぎずして、女眞本國の精兵に非るなり。されば之れと戰つて捷ち、其後、一試再試を重ぬる間に、我が內情暴露せられ、女眞銳師を出して之を衝くに至らば、吾が義兵は必ずや一敗地に塗るゝなるべし。かくて一方に於て失敗する時は、他の方面に勃興せる者も、氣疲れて退くに至るべく、屢〻進んで屢〻退けば、吾が三軍の士氣沮喪して賴む所を失はんとす。當時未だこゝに至らざりしは、軍を旋へしたるが故なり。

試に局外に立ちて、女眞と宋との彼我の情形を審にすれば、宋軍が勇躍して進める後に、一轉して潰散せんこと、頗る見易き理ならずや。義社は宋軍を恃んで

成立したるものなれば、岳飛一たび軍を旋へし、義社數十萬人一散していづくに往けるかを知らず。宋軍義社を恃んで進退せば、義社一たび敗衂して後宋軍獨り存する能はず。兩つながら相恃めば、兩つながら相失すべし。女眞は專一の兵を以て直進して恃む所なく、其の鋭鋒に抗せんこと極て困難なりと謂はざるべからず。夫れ、衆を用ふるは獨を用ふるに若かざること、古より然り。故に東晉の謝安石（謝安字は安石）は桓沖入援の兵を卻けたれども勝ち、苻堅は鮮卑・氐羌・河西の衆を併せ率ゐて然かも亡びたり。竿を揭げて旗幟となし、鉏を揮つて兵器となし、山野に放食して屯集するが如き烏合の義兵を以て女眞の强兵に當らんこと此れ群羊の虎を防ぐが如き有樣なり、安んぞ恃むべけんや。

宗汝霖が群盜を利用したりしは、猶ほ可なり。已に盜となれる者は死を畏れざるものなり。盜たるが故に、我れ之れを選擇し、其兵となすに任へざるものを陶汰するを得べし。盜にして其の巨魁あらば、之れをして吾が軍伍に加はらしむるも可なり。家を去つて盜となれば、身家の累なく、敗を以て憂となさず。故に諸將は江南の盜を收めて之れを利用したるなり。義社の如きは、既に義を以て名となせば、之れを陶汰して歸する所なからしむるに忍びず、之れを帥ゐても法を行ふ能はず、進退彼等の意に任せ、我れ之れを統裁するを得ずんば、之れを馭するも困難なり。之を馭すること難し、況んや之れを恃むべけんや。宋の將に亡びんとするや、江湘閩廣の間、起るもの衆かりき。然かも遂に碉門（卽ち碉洲なり宋の鑑崇敗殘の後に殁せりこゝの禍を救ふ能はざりき。文信國（文天祥なり信國公に封ぜらるる）が其の恃む可からざるに之れを恃みたるは、已むを得ざる思案の極に出でたるものにして、恃むべきを知つて之れを恃むを宜しと爲したるにはあらざるなり。

第八節　秦檜簒奪の心事

小序　秦檜は、高宗の朝に在つて威權を弄し、和議を唱へて、己れに反抗するものを排除して憚る所なく、政を執ること凡そ十八年、高宗の紹興二十五年、六十六歲を以て殁したり。本論の要旨は、秦檜は其の初め帝位を窺ふ程の野心なかりしも、勢を積むに從つて何事も爲し得ざるは無きを知り、遂に簒奪の陰謀を懷くに至れりと推測するを得べく、高宗が秦檜の行爲を監視して、其の野心を豫防するの道を盡さゞりしは非なりと謂ふに在り。

倚るべき勢なく、乘ずべき機會なきに、唯一念猝に興つて、天下を經略せんことを圖り、遂に自から天子とならんことを期する者は、古今未だこれ有らず。帝王の興るや、天の賜を求むることなくして、天命自から之れに歸するものなることは、先儒詳に之れを論ぜり、今更に贅言するを要せず。

帝堯の世、岳牧朝廷に盈ち、帝の九子みな無能なりしにあらず、舜の如き耕稼陶漁を業としたるものが、初より帝位を禪られんことを豫期すべきやうなし。周の武王は、養晦して老齢已に八十を超えたり、天命を受くるに及ばずして崩ぜしむるとも、壽ならずとせず。武王已に高齢老衰の身を以て、己れの國を保つことすら容易ならず、況んや天下を治むるをや、然も尚ほ十三年の久しきを待つて後に、軍を起して殷を伐てり。武王に許して其の氣力を助けたるは、實に天なり、武王自から期待し得べきものに非ず。

故に聖王天下を取る心なくも、時に乘じて發動するは、天命に因るなり。聖人すら自から期待すべからず、況んや其れ以下の者に於てをや。通常人にして名を當時に顯はせるもの、或は武臣たり、或は文吏たるものあらん。其の胸中に規畫する所は、拓落にして測る可からずと雖、其歸着する所は、大概知るべきなり。生死屈伸、榮辱貴賤は、豫め測るべからず。志は向ふ所ありとも、之れを望んで必ずしも達すること能はず。志の向ふ所未だ決せざるものは、姑く試みて漸次に進み、初より期待する所なかるべきなり。少しく志を得たればとて、忽卒に躍起し、吾れ天下を掩有し、南面して四海の英傑を馭し、全く俯首して臣妾と稱せしめんと謂ふが如きは、狂人の妄念のみ。かゝる妄念を懷くが故に、蹶然一起して早くも誅滅せらる。

故に、亂臣賊子にして簒奪を成就せる者も、初より必成を期待せるにあらざるものなるを知るべし。曹操自から、吾れ死して後征西將軍の墓と題せらるれば足れりといへるは、必ずしも欺言にあらじ。橋元は、望を曹操に囑したれども、其の天子たらんことを期待せるにあらざりしに、然かも曹操は橋元が己れを知れるに感じたる程なれば、曹操も出でて後漢に仕へたる當初には、劉氏の帝室を窺奪する志なかりしこと明白なり。されば人主の臣下を馭するに方り、必ずしも防ぐを要せざる所を防ぎ、防ぐべき所を防がざるは、豫防の道に明らかなるもの

に非ざるなり。

秦檜專政の晩年、大に刑獄を起し、將に盡く張浚・趙鼎・胡寅・洪皓の諸公を殺して、宗室をも捕へんとしき。此の時に當つて、諸公遠方に竄處し、復た一議をも進めて和議の非を論ずるを得ず、從つて秦檜の爲す所に反抗するを得ざりき。和議已に成り、諸將の兵已に解け、秦檜專ら庶政を總べ世祿を受け、欲する所遂げ得ざるはなかりき。秦檜死して幾ばくもなく、高宗が前に貶謫せられし人々を召還せるを觀れば、秦檜が深く諸公を毒したるも、必ずしも高宗の意を迎ふるが爲に非ざりしなり。秦檜が己れに反對せる人々を誅逐して、一人も餘さじと勉めたりしは、決して一時の忿怒中傷を快うせんと欲したるに止まらず。彼れ偏に己れの與黨を要路に置き、宋朝をして悉く信賴すべき親臣を失はしめ、忠義の心なくして籠絡し易きものは、早くより之れを收容したりしかば、秦檜の勢力の根底固くして、何事も成らざるなき有樣なりき。高宗の齡已に傾き、晉安郡王（後の孝宗）は疏族の中より選ばれたれど、未だ正式に嫡嗣に立てられたるに非ず、一旦高宗崩じて、秦檜なほ死せざりしならば、彼れ必ず意のまゝに幼少の君を立て、次で其の位を奪ひたるなるべし。外には女眞の援を借り、內には群姦の力を利し、宋の帝室を覆へさんこと眞に易々たりしなり。秦檜の野心も亦極めて明白なるにあらずといふを得んや。

彼れ靖康の年に當つて、始て政府に入り、馬伸等と與に、女眞に請ふて趙氏（宋朝）の後を立てんとしたる頃は、さ程の野心を蓄へざりしなり。女眞より歸來し女眞の大臣撻懶の旨を受け、力めて和議を主張するに及んでも、亦唯和を成就せる功に由つて賞を受けんことを欲したるのみ。高宗の意を迎へて、北伐の軍を旋へし、諸將の兵を解き、獨り百僚の上に立つに至つても、猶ほ未だ逆謀の必成を期するを得ざりしなり。已にして諸賢は竄せられ、岳飛は死し、韓世忠は閒居し、劉錡・吳玠・吳璘は手を斂めて命を聽き、張俊は諸軍を總領せんとの願を遂げずして罷められたり。是に於てか秦檜は、何事も意の如くならざるはなく、人々己れを如何ともする能はず、高宗も畏れて手を下さゞるを見るに及んで、遂に神器を睥睨し、先づ誅逐を行つて凶威を試むるに至れり。勢激すれば、鼠も變じて虎たらんとす、決して早くより計畫する所あつて、而して後に大惡を成すにはあらざる

なり。易に曰く、履霜陰始凝也、馴致其道至堅冰也と。馴致とは、初めに成らざりしものが、漸次に成就するに至るを謂ふなり。

嗚呼、宋の其の臣を猜防したるや甚だし。陳橋の故事（宋の太祖は汴京の防なる陳橋驛に於て強て部下に擁せられて帝となりぬ）に鑒み、五代の前例に懲り、功あるものは必ず抑へ、權あるものは必ず奪ひ高宗に至つて、宋朝の微弱極まりたるに、猶ほ其の臣下の强盛を畏れ、ほしひまゝに削奪を加へたり。秦檜は文墨を以て家を起し、孤身遠くより至れるものなれば、其の他心なきを信じ得べき筈なりしに、禍機却て中より發し、遂に滔天の勢を成し、蕭衍・楊堅の勢を成せり。高宗は刃を靴中に藏して、秦檜に對して嚴に戒むる所ありしも、遂に自から振ふことを得ざりき。前に豫め思慮する所なくして霜と冰とを辨ぜんとするは不可能の事なり。

夫れ霜は冰にあらず。而して陰森慘冽の氣、一夕空に流るれば、則ち恰然怵栗の情自から人の志氣に感ず。此の時に當つて早く霜と冰とを辨ぜんと欲せば何の辨じ難きことかあらん。辨じ難きものは志なり。辨じ得べきものは人なり。志は定まり無し、道に志すものも、勢溢れて亂るゝことあり、邪道に志すものも、力窮つて却て屈することあり。人は定まり有り、賢者の志已に變ずるとも、憚る所あつて敢て爲さず、姦人の志未だ萠さずと雖、必ず恃む所あつて其の利を操ることあり。故に其の始を察するに、秦檜は、曹操・司馬懿の如き簒奪の野心ありしに非ざるは明らかにして、之れに酷評を下すは非なり。其の所行を考ふるに石敬塘・劉豫の如く北狄の力を借りて自立を圖らんこと、或は之れ有るべきを察し得べし。彼れ女眞に囚はれて北に往けるや、何㮚・孫傅・司馬朴と同じく繫がれて、獨り殺されず、また洪皓・朱弁と同じく敵地に留められたれども、是の二人の如く拘束せらるゝ事なく、身を脫して宋に返るや、其の妻子を保有し、一家を舉けて安歸したり。されば、彼れが凶狼の驕虜に親しみて己れの行動を束縛することを共にしたる人々にして、進退共に相離れ難く、朝野兵民も皆望みを囑して力と賴める程なりしに、秦檜一たび志を得るに及んで、此の諸人をして屏息竄逐して敢て爭ふ能はざらしめたる手腕は、畏るべきものなり。岳飛が收集せる群盜中原に力戰し、將士は岳飛の爲めに死するを樂しめる程なりしに、之れを削り、之れ

を斥け、之れを囚へ、之れを殺し、人をして非難の聲を放たしめざりし手腕は、畏るべきものなり。韓世忠數萬の衆を撫し、高宗が苗傅・劉正彦の逆徒に囚はれたるを救ひ、上は君心を得、下は民衆に信ぜられたるに、獨り秦檜に對して一言だも反へすこと能はず、首を俯し兵を解き、一身の安全を保つに甘んぜしめたる秦檜の手腕は、畏るべきものなり。張俊は位望最も高く、秦檜と謀を合せて、岳飛の一族を夷らげ、其の兵を握らんことを欲したりしに、秦檜忽ち約を違へ、却て兵を奪ひ位を去らしめたり、然るに張俊が前約を以て責むる能はず、耳を帖れて伏從するに至りし秦檜の手腕は、尤も畏るべきものなり。かくの如く畏るべき才を懷き先づ爲さんと欲して爲し、それに成功して後、又進んで爲す所あり、力を用ふること強く、機を見ること巧に、鋭進すれども強て目的を定めざるは狡猾なる所以にして、然かも要領を握つて、失はず、取らずんば止まざる覺悟を堅うしたり。彼れが漸く簒奪の野心を懷き、時機に乘じて之れを決行し、何の顧慮する所なかりしなるべき事は、殆ど疑を容れざる所なり。

和議を主張したる者には、前に汪伯彦・黄潛善あり、後に湯思退・史彌遠あり、人々之れと爭ふを敢てしたりしは、爭ふべき勢ありたればなり、君固く之れを信ぜざりしは、信ぜらるべき術を知らざりし故なり。故に忽ち用ひられて忽ち黜けられ、終に公論の歸する所に勝つ能はざりき。秦檜獨り盡く天下の口を箝束し、盡く數十年の施設を覆へし、狡夷すらも籠絡せられ、六軍みな安んじて解散せられたるが如きは、多年の積勢の然らしむる所にして、一朝一夕の成功にはあらざるなり。其の時に當つて、其の面目を窺ひ、其の施設を觀、其の言說を聞けば、苟も機微を洞察するに心を用ふる人なりせば、志の如何を問はず、直ちに其の人に卽いて十分に其の人物を判定し得べき理ならずや。堅冰は霜の志にあらず、勢なり霜の漸く變じて堅冰となることあり、又終に變ぜざることもあるは、之れを辨ずる者自から知るべき事にして、强て變と不變とを猜防するの要なし、又之れを禁制するの要なきなり。人の爲す所を監視し、進んで其の志如何を問はざるも固とに其の人を辨知し得べし。

第十一章　孝宗論

第一節　人材迫害の禍

小序　高宗の次に立てるは孝宗にして、其の在位二十七年間は小康を得たりとはいへ、敢て活躍したることなし。王船山の論に據れば、前々より人材を迫害したる餘毒なほ未だ消えず、人材ありとも、憚つて自から振はんとせざりしに因るなりといふ。

あまりに人材を摧抑すれば、天下に才物なきに至り、流れて百年の後に及び、變革を施すにあらずんば、才物の現はれんこと難し。故に邪臣の惡事は、刑網を設けて士氣を摧き、國之れが爲めに衰亡に傾くより大なるはなし。其の後、摧折を退しうせる邪臣も既に歿し、迫害の風も次第に行はれざるに至りて、當世の政を執るものは、宜しく天下の人材を拔きて、扶危定傾の大業を建つべき筈なり。然るに、前代迫害の餘毒なほ未だ消えず、心定まらざるものは依然として畏縮の情

あり、貞節を懷くものは、久しく世と相容れずして、退處して獨り正義の地を守れり。是に於て、先賢の偉業終に復すべからず。

かくの如き風潮に伴ふ弊害三あり、何れも國に益する所なきものなり。先づ其の下なる者より言へば、彼等は世事悉く思ひのまゝならざるを見聞し、いづくにか身を托するの地を求めんと欲し、正邪の利害を較べて、邪に隨ふの安全にして有利なるを察し、相當の才を懷けるにも係らず、之れを邪道に惡用し、國の治亂につきて相關する所なきが如し。其の次なる者は、志は貞正にして、邪に從ふを欲せず、君子の譏を受けず、小人の怒に觸れず、如何なる境遇に處しても窮する所なく進退時に應じて強て拘はらざるを善しと考へ、國の爲めに己れの才を盡さゞる代りに、之れを利用して私益を圖らんともせず、寛大なるが如くにして、實は無爲に了るなり。其の上なる者は、眞に正道を守れる君子にして、天下の衆望を集め、後世に推尊せらるべき人なれども、不幸にして、當世の通習と相容るゝ能はず、善を好むこと篤く、惡を惡むこと嚴にして、正義の大道を唱ふること堂々たるは可なりとしても、之れを當世に實用するの道に艱み、淸平の世に立たしむべく

して、危疑の際に處せしむべからざるものなり。凡そ人材を摧抑したる後には、かくの如き弊風を生じ、百年に亙つて息まず、故に邪臣の惡これより大なるはなしといふなり。

宋代に於て、王安石が舜四凶を殛すの說を唱へて神宗を動かしてより、乃ち大政を執り、廣く祠祿を設け、以て己れに反抗するものを排斥し、其黨之れに因つて善人を攻擊し、蔡京が政を執るに至つて、石に勒して名を題し、其人の子孫をも禁錮し、天下有用の士は悉く刑網に罹りぬ。延て靖康の世に及び、女眞長驅して入り、徽宗・欽宗の二帝捕へられ、號哭して京城を出で、而して宋齊愈・洪芻の流は、才慧なきにあらず、又時名ありし人なるに、或は平然として逆臣(張邦昌)の名を書し、或は敵人と結んで宮嬪の列を亂るを敢てしたり。憤恥自强の主ありといへども亦かくの如き痿痺不仁の者の充滿するを如何ともする能はざるなり。高宗が江南に移るや、士氣未だ復せざりしに、秦檜復た起つて重ねて之れを摧けり。趙鼎・張俊・胡寅・李綱の如き、生命すら幾んど危く、群情震恐して適從する所なく、姦邪相次で、天下の士氣を抑割すること、殆ど百年ならんとす。士たる者、志定まらず、情安んぜず、いかでか振ひ起つて英才を煥發し、以て經略の雄圖を廻らし得べき。

孝宗立ちて、有爲の志を誓ひ、人材を求めんとするに當つて、邪佞を遠ざけ、恩禮を厚うし、選を愼んで篤く之れを信ずるとも、其得る所大概察するに難からず。陳康伯・葉禹・陳俊卿・虞允文の如きは、皆當時の俊才にあらずと謂ふ可からず。內は身を失はず、上は國を誤らず、興すべき利を興して民も亦傷まず、辨ずべき姦を辨じて主も亦惑はず。君の迷はざるに會ひ、敵の爭はざるに乘じて、國以て小康を得たり。周必大・王十朋・范成大・楊萬里の流の如きは、錚々たる外貌を具へ、其の文雅雍容の態度は以て治平を緣飾するに足るのみ。之れを昔人に較ぶるに、彼等は、王茂宏・謝安石・李長源・陸敬輿が國家匡濟の大才を有せるに及ぶべくもあらず、郗鑒の嚴正・謝宏微の雅量、崔祐甫の淸操・杜黃裳の通識にも伯仲する能はざるものなり。是れより以下、葉適・辛棄疾の輩が己れの才に慢じ、虛願あつて定情無きが如きは愈言ふに足らず。推して上なるものを求むるに、朱元晦・張敬夫・劉共父の三君子は、古今見易からざる大賢に相違なきも、姦邪の橫暴に懲り、世間より離れて、才器を振ふの地を得ず、人事の定まりなきを鑒み、身を淸うするの念切に

して大事に任ずるの志堅からず、仇を報いて國を復するの名を正しうし、本を固めて自から强うするの道を持すべき事を思慮せざるに非ずとはいへ、言論徒らに長うして、輕々しく英氣を發揮するを好まざるに似たり。

嗚呼、亂世に煩はされず、獨立して憂へざるものすら、終に亂世の餘風に苦しめられて、正道を實施すること難し。有德のもの孤立して世と相合はざるは、宋が久しき間に次第に正義を迫害し來れる結果なり。孤ならざるを得ざる時勢に在つて、已むを得ず世と相離るゝに至るとせば、之れを如何ともせんやうなし。孝宗をして最上の敬意を表して三君子を百官の上に進ましむるとも、必ずしも非凡の雄圖をめぐらして國土を廓清すべしとは思はれず。人材を摧仰すること深からざりしならんには、國家興復の大猷に任ずべきもの、豈に但だ三君子のみに止まらんや。

凡そ當時に在つて、身を奉じて主君に事へ而して過少き者は、皆悅んで尊俎折衝の大用を求め、斯民を左衽より免かれしむるを欲せざるはなきなり。然るに人材迫害の餘毒を畏るゝ念深く、永く一身の安きを保たんと欲するが故に、日に

削られ月に衰へ、坐がらにして萬古の中原異族の手に陷るを待つのみ。其の禍木を尋ぬるに、王安石が才を妬み自から用ふるの惡事、獸を率ゐて人を食ふに等しく、ただ法を變じ紀を亂り、當世の生民を虐げたるのみに非るなり。詩に曰く周王壽考、遐不作人と、鳶飛んで天に至り、魚淵に躍るが如く、人各自得し、壽考にして人を作り、延て遐遠に及べり。故に周衰へても、魯衛に君子の器多く、齊に天下の才あり、之れに由つて中國を保ち四夷を攘ひ、文王武王の德澤を永遠に後世に及ぼし、名家の子孫は利欲を貪らず、崛起の英才は孤危の憂を抱かず、人々守るべき所を守り、世情に通じて敢て世と離るゝことなく、熟慮して言を立て、節を高うして猥に世を慣らざりき。此の如き成果は、假令後世之れを書して傳へざるも自から天地の承認する所たるべく、人を作るの用實に大なりと謂ふべし。此の道を講ぜずして、申不害、商鞅の法を取り、天下の心を解散して其の氣を挫きながら、天下に才なしと叫ぶ。實は此の如くして天下の才を失ふに至るなり。是れ眞に痛哭すべし。

第二節　南北講和の眞相

小序　南宋の孝宗と金の世宗とは、時を同じうして位に在り、南宋の乾道元年卽ち金の大定五年、兩國和を結び、從來の君臣の禮を罷め、唯宋帝は姪金帝は叔と稱することゝなりぬ。是れより南北の交爭久しく絶えたり。後世、支那の論者は、二帝共に寛仁の君なりしが故に、此の如き成果を得たるなりと謂へるに對して、王船山は、是れ二國が同じく活躍する能はざる內情に迫られたる結果にして、二國同じく衰亡したる前兆實にこゝに在りと喝破せり。

乾道元年、和議再び成り、宋と女眞と、兵革の爭なきこと四十年に及べり。論者曰く、宋の孝宗と女眞の世宗とは、共に仁恕の心を懷き、天下皆其の德を被れりと嗚呼是れ偸安の士、與に始を慮り難き民が、利を思ふて軍事を罷めんことを樂しみ、而して無窮の禍を憂へざる僻論にして、かくの如き流俗の言一たび唱へられて天下交〻之れに和せりと雖、夫れ誰か之れを聽くものぞ。

宋が和に決したるは、孝宗の心に非るなり。孝宗嗣立以來、宴寢の間にも忘れざりしは興復の擧にして、割地に終るは、其の忍びざりし所なり。完顏雍（金帝世宗）も雄心を抑へたりとはいへ、豈に欲に厭きて江南に垂涎せざるものならんや。故に和は皆己むを得ざるに出で、姑く民を息むるを以て名となしたるものなるに無智の者從つて之れを信じ、交〻起つて之れを譽むるは、亦愚ならずや。宋と女眞とが枕を並べて亡べる前兆は、已にこゝに存せり。

宋は、秦檜が權を持し忠勇を摧折してより、僅に死亡を免れたる者は、忽皇として身を脫し、敢て發奮することなく、以て國家他日干城の用を待てり。諸帥老死して、將帥に充てらるゝ者は、皆法規を守り嫌疑を免かれんと欲する凡人なり。其の士卒は、甲斷え矛撓み、逍遙坐食、子を抱て悅び、戈を荷ひ壘を守るの勞を畏るること、湯火の觸るゝ可からざるが如し。其の士大夫は、言壯なれども心疲れ、心慣れども氣衰へ、不肖のものは一日の娛樂に耽り、賢者は平生の進退を憚り、苟も過なからんことを求む。自から君子たるを誇れる輩は、封疆の論を目して前日の夢なりと爲す。かくの如ければ、則ち孝宗猝に振ひ起ち、疾呼焦心すと雖、固とより此の如き無氣力の徒を如何ともすべきやうなし。故に符離の小敗（孝宗の歷興元年宋軍金軍とこゝに戰つて敗れたり）は國威に大損なかりしにも係らず、事を生じ民を勞すとの怨謗喧

しく湧き出でたり。稍〻對等の國交を正しうし、歲幣を輕減するに及んで、下に在るものは之れが爲めに訣を獻じ、上たるもの亦これを以て自から安んぜざる可からざるに至れり。如何ともすべきなくして之れを命に委ね、一たび仆れて再び起つ能はず、衰息奄々として復た生人の氣あるべしとも見えざりき。

女眞の初て起れるや、海東の孤軍を以てして鋭鋒當り難く、駸々として中國を奪ひたりしは、其の力の强きを恃みたればなり。力を以て國を立つる者は、盛衰共に其の力に準ずる者なり。完顏亮の時に至りて、梟雄の將、敢死の兵、或は老い或は死して、存する者僅少なりき。彼れ又、猜忌の威を以て、其の部曲を誅鋤し、率るて南侵したるものは、皆疲弱にして心畔ける劣輩なりき。故に大江に臨んで采石磯を渡らんとせしに、宋の虞允文は不敎の兵を以て十分に之れを挫き得たり。完顏雍は衆に推戴せられたりと雖、實は完顏亮に對する簒弑に外ならず。機に乘じ運に順ひ、衆心に徇つて身を藏し、幸に富貴を保てるばかりにて、決して號令一下部下の死命を左右し、白刃を冒して奔走せしむる程の威嚴を具ふるものに非ず。金人の意は、逆亮吾れを毒す、吾れ汝に賴つて安を圖るといふに在り雍も亦、吾れ亮が兵を好めるに懲りて、今や汝を安んぜんとす、何ぞ江南を圖るに遑あらんやと言ふなるべし。且つ海濱穴處の金人が、中國に寄寓してより、錦を着け甘を喰ひ、笙歌燕樂、金人青年の心を蕩らかせり。金帝雍が雄心を馳せ江南を窺はんと欲すとも、依賴するに足るべき人材なく、因つて宋の王之望の來るを歡迎して、宋と共に姑息を圖りしは、實は如何ともする能はざりし事情に迫られたるにて、宋と同一轍なりといふべし。對等の禮を定め、四州の地を得たるは、過分の幸にして、抑〻又何をか求めんや。

かくて宋と女眞とは、其の內情を同じうし、相倣ふて衰運に傾けるなり、何の賢きことかあらん。豈に斯民の情に忍びず、干戈を脫して衽席に安んぜしめんとの親切あらんや。君は其の名義を作り、吾れ以て民を息むるなりといひ、下の訣ふものは、民を息むるは大君の仁なりといひ、無智の民は旦夕の安を偸み、爭ふて之れに贊同し、吾が君と執政者とは、能く我れをして息ましむといふ。然るに息まんと欲しても息ましめざる事情の常に存するを知らざるべからず。一たび息んで其の止まる所を知らず、息むべからざる大禍は百餘年に亙つて止まざらん

とす。是れ必然自から招くべき災禍にして、災禍已に著るしきを待つて始めて之れを覺るべきものにあらず。災禍已に著るしきに、然かも論者猶ほ其の前兆の那邊に存するかを察する能はずといふは、惑へるも亦甚だしからずや。

故に曰く、天下安しと雖、戰を忘るれば必ず危く、安うして戰を忘るれば、其の危きこと必せり、況んや危きに在りながら、戰を忘るゝを以て安しと爲すをや。女眞は其の故穴を去り、部落を擧げて客土に棲み、鹵獲の樂しみに耽り、驕悍の氣を失ひ、廣大の中原に據りて、江淮の米粟を得ず、危しと謂ふべし。宋は卽ち冀州代北の士馬を有せず、已に山河の險阻を失ひ、又文弱の江東を撫して、海隅の僻地に居る、是れ亦危しと謂ふべし。危きに懲りずば、亡ぶるに當つて恃むべき所なし寒心すべきなり。

既衰の女眞を以てして、宋之れを如何ともする無しとせば、女眞より强きものに對しては、愈〻之れを如何ともする能はじ。積弱の宋を以てして、女眞之れを如何ともする無しとせば、苟も女眞に非ざるものならば、固とに之れを如何ともするを得べき筈なり。女眞一たび傾いて、宋隨つて潰え、奇渥溫氏（蒙古帝室の姓）談笑して之れを睥睨し、己れの羽翼成り實力の備はるを待てり、羽翼成り實力備はるに至つては、蒙古は一時をも忽にせずして殺到すべきなり。

宋をして能く深入して女眞を伐たしめば、威北方に伸び、踵で起れる蒙古も懼心を懷くなるべし。宋大に志を女眞に逞しうする能はずして、女眞の兵解けずんば、女眞は、日に戰に習ひて、其の備を弛うせざるなるべし。若し又女眞をして能く宋を寬ふて江淮を犯さしめば、宋も亦警しむるを知つて自强の策を講ずべく、蒙古に攻められて早くも海に入つて亡ぶるに至らざりしならん。故に金將兀朮の南侵急にして、岳飛、劉錡、韓世忠、吳玠の軍、日々に振ひしは、迫られて激したればなり。拓跋氏好みを齊梁に通じ、洛陽に安坐し、文雅を緣飾せしが、六鎭の寇起り、元氏の族（後魏の孝文帝の時姓拓跋氏を元氏と改む）盡く滅びたりしは、驕りに溺れたればなり。忽然一息國已に危く、民其の生を保たざるに至る所以は、達識者の洞察する所にして流俗の與かり知るべき所にあらざるなり。

第十二章　光宗論

第一節　賣名論

小序　孝宗位を子光宗に禪りて、太上皇帝となり、孝宗の母猶ほ存して太皇太后たりき。光宗の皇后李氏は悍にして妬なり、皇子嘉王を立てゝ皇太子と爲さんと欲したるに、太上皇帝許さゞりしかば、李后大に恨み、太上皇帝が廢立の意ありと誣ひて光宗に訴ふ。光宗驚き且つ疑ひ、是れより太上皇帝と相惡しく、太上皇帝の疾篤きに及んでも、之れを問ふを敢てせざりし程なり。太上皇帝崩ずるに及び、光宗已れも亦疾あるに托して喪禮を盡さゞりき。幾ばくもなく、光宗卒倒して、中外危懼の念を生じたれば、太皇太后は、韓侂胄の言を容れ嘉王をして位に卽かしめたり、寧宗これなり。王船山は、光宗を罵つて大不孝の人なりといひ、當時の宰相留正が帝をして反省せしむるの道を盡さず、唯濫に論爭を試み、益〻光宗不孝の名を顯はしたるに過ぎざるを咎め、彼れが賣名の徒たるを痛論したり。

君は諫を拒んで欲を恣にし、臣は賢を嫉んで諛を呈し、共に正諫の士を名づけて賣名(沽名)といふ。夫れ亦名なるものゝ生ずる所以を念へるか。名とは義の顯はるゝ所にして、天下後世是非の公論の分るゝ要點なり。自からは名あるほどならば、則ち名は諫者の手に存すといふべし。自からば名とすべからざる惡を懷きつゝ、諫者をして憚る所なく名を賣らしむるは、己れの無道を曝露するに同じ。故に名を賣る者は、人君をして名なるものゝ犯すべからざるを知らしむるものなれば、君にして幾分にても名とすべきものを有したらんには、名を賣る者も之れを賣るに由なかるべし。然れども、人臣たるもの、唯名を賣らんとする心を以て君に事ふるとせば、是れ正に國の不幸なり。

君に大惡ありて、大臣其責に任じ、大臣諫むる能はずして、諫臣其責に任じ諫臣も諫むるを得ずして後、百官衆民皆奮起して之れを論ずべし。大小臣民競ひ起つて之れを論じ、唯後れんとを恐るゝが如くなるに至れば、其首唱者は誠に已むを得ざるに出でたるにもせよ、之れに附和して濫に喧爭する者の中には、名を賣らんとして論を弄ぶ者、十に八九あらん。是に於て、庸主姦臣は、之れに激せられ

て反抗を試み、論者は、貶斥に會ふを以て誇りとなし、己れの一身を清うするに志して、國家を姦邪の掌中に棄て、吾れは忠にして罪を獲たる正人なりといひて自負するのみ。かくの如くんば、是れ亦名を賣るの咎を免かれざるものなり。

君の過といひても、天倫を害ひ、人をして絶望せしむる程のものならずば、他日之れを革正するの機なきに非ず、群下の論爭に忿激するとしても、其の失猶ほ小なり。天倫の保たるゝと破るゝと、人たると禽獸たるとは、實に一髮の差あるのみ、一歩を誤れば終に脱する能はず。かくの如き大惡に對しては、唯雷同して之れを議し、君をして依然として大惡に沈淪せしむるが如きは、甚だ不可なり。不孝の如きは人倫の大惡なり。而して孝情なるものは、義理を以て說明し得べからざる至誠に出づるものにして、或は利に迷はされ、或は婦人小人に惑はされ、其の至誠を奪はれて、知らず識らず不孝に陷るものなり。不孝を諭すには義理を用ふべからず、寬仁の心を推し、間に乘じて柔らかに之れを導き、以て其の迷妄を啓き初心の至誠に反へらしむべきなり。大孝の舜も、人倫を敎ふるに寬を以て第一としたり。寬の用たるや、實に大なり。寬を以て人主を導き其の恩情を全うせしめたるは、唐の李長源（李泌字は長源）以外に其の人を求め難し。李長源は、始に之れを肅宗に用ひ、次で之れを德宗に用ひ、いづれも子に對する父の處置につきて諫言を進めたりき。彼れの諫言を進むるや、坐談に托して誠意を吐露し、獨り調停の責に任じて、群言の助けを待たず、易々として人主胸中の積怨を解くを得たり。肅宗の父（玄宗）に對する非事に至つては、獨り舌を結んで言はざりき、是れ其の非事の大惡たるを忘れたるには非ず、諫言聽かれずして却て不測の禍を激成せんよりは、寧ろ姑く忍容し、不孝の者をして自から反省して不軌の心を消さしむるに若かずと思慮したるが爲めなり。李長源の苦心察するに餘あり、而して唐も亦暫く安きを得たり。

嗚呼、人君にして忍んで人情に背き公に不孝を爲し、天下に對して恥づることを知らざるものは、獨り光宗あるのみ。光宗は、古今に亙りて、人面獸心の無類なるものなり。是に於て、宰相留正の罪、逃るゝ能はず。當時、百官庶民喧爭して光宗の非理を難じたるに、留正は大臣の身を以て之れを傍觀して自から責に任ずるを敢てせず、之れが爲めに寧宗の卽位正しからず、韓侂胄は姦を逞しうし、毒を

士人に流し、禍を邊彊に遺すに至りしは、其の害豈に淺鮮ならんや。

蓋し騷然群起して爭ふ者は、皆名を求むる心あり、己れの孝を推して己れの忠を盡さんとする者に非ず。留正の自ら處するや、諫めて從はれずんば則ち去る已に去れば、名己れに歸せんと思へるなり。かくて君は益〻不孝の名を顯はし、己れは身を清うするの名を得べきも、天理綱常の存亡は、一瞬の差に在るを思はゞ人君の股肱たるべき大臣にして、天地に容れられざる大不孝の名を以て、之れを君父に歸して平然たるべけんや。光宗の如きは人君とするに足らざる事、灼然として見易きが故に、去るとすれは、已に早く去るべき所なり。人君とすべからざるを知りながら、早く身を退けず、去るに當つても、逡巡して衆人の心を動搖せしむ。其舉動の輕浮なるは、唯姦人の嘲笑を招くに過ぎざること久し。

光宗の惡は、劉劭（南朝の宋の文帝の太子にして父を弑せり）の凶威嚮ひ近づく可からざるが如きにあらず。悍婦小人に煩はされて正道を脫したるなり。留正は大臣として、上は孝宗の知遇を受け、內は兩宮太后の倚任あり、誠に能く生死を忘れて社稷を衞り、人倫の頽敗を救はんとせば、雷允恭任守忠の先例にも鑒るべきにあらずや。楊舜卿陳源の如き姦人は、唐の李輔國魚朝恩が兵を擁し黨を恃める程の威あるに非ず、兩宮より一片の指令を請ふて、彼等を放逐せんこと易々たりしのみ。然るに留正之れを敢てする能はざりき。能はずんば、宜しく至誠を以て從容として君を正道に導き、君の大惡をして世間に曝露せしめず、君をして自新の路に出でしむべきなり。光宗の皇后李氏悍なりと雖、光宗が帝位を去つて後、別に企つる所なかりしを見れば、必ずしも制し難き程のものにあらじ。留正は之れをも敢てする能はざりき。能はずんば、姑く忍んで唐の肅宗に同じき光宗の不孝を傍觀したとへ唐の肅宗が父の玄宗を强て南內より西內へ遷したる程の猜嫌を生ずるとも、國家の存亡に關する迄には至らざるを以て滿足すべきなり。

當時、境を歷するの敵なく、帝位を窺ふの宗室なく、簒奪を企つる大臣なく、兵を弄する草莽の士もなく、朝野靜正にして、無事に安んじたる時なり。然るに留正は、故なくして狼狽し、大臣たるの職を措きて、其の責を百僚に分ち、新進喜言の士を招引し、下は大學高談の子に及べり。一鳴百和、天を呼び地に叫び、以て昏主妬后と口論を交べ、勝たざれば、相率ゐて忽皇として奔り去りぬ。これ何するもの

ぞや。昏悖の主は曰はん、吾が不孝の名、大臣已に我れに加へたり、群臣已に我に加へたり、海内士民我れに加へざるはなし、我れ後世に謝すべきなしと、乃ち自棄の心を生じて、兩宮を幽廢するが如き事あるべきなり。世人は曰はん、吾れは大義に束縛せられて孝道を奉ずる迄の事なり、不孝の惡も强て除くべからず、彼等は少しく論爭を試み、勝たずして奔り走れり、彼等は吾が高臥傍觀を咎めんやうなかるべしと。此時に方つて、人心洶々として大禍の旦夕に迫れるが如き思あり。かくて帝位を易ゆるの策突發し、姦人之れに乘じて國家再造の功を竊むに至りしなり。其の由來を考ふるに、留正が然らしめたるにあらずして、誰れか然らしめたりしか。

人にして人と名を爭へば、名得て實すでに缺くるなり。大臣にして君と名を爭へば名は己れに在つて、害は國に在り。況んや君子にして大不肖人と名を爭ひ、爭ふに及ばざる所を爭ひ、徒らに爭を開いて愈〻陋態を示すに於てをや。一諫一去、惡んぞ留正が君子たるの名を益すに足らんや。留正は宗社の計を爲したりといふは非なり、宗社未だ危うからざりしなり、留正が衆を率ゐて國を棄てたるこそ、實は國を危うしたるものと謂ふべけれ。留正が大倫の爲めに論爭したりとするは、最も非なり。光宗の不孝は、光宗自から致したるものにて、之れを救ふに由なしとするも、寧宗不孝にして父に背て立ちたるは、實は留正が然らしめたる所ならずや。滿廷の人論爭して去れる後、光宗をして懼れて父に對する喪禮に服せしむるとも、不孝の名と實とは決して輕減せらるべきにあらず。若し留正之れを自負し、此れ吾が衆を率ゐて爭へる力なりと謂はゞ、是れ正に名を賣るものにして、全きを求めて却て自から毀つものなり。

何を以て大臣が能く其の道を盡せるを知るか。諫臣に倚つて以て雷同の議を興さゞれば、則ち體國の誠至れりといふべし。何を以て諫臣が能く其の職に盡せるを知るか。群臣士民を引きて以て沸騰の口を興さゞれば、則ち直道の行伸びたりといふべし。留正諸人の如きは、氣に任せて名に趨り、氣盈ちて竭き易く、權あつて執らず、幾あつて審にせず、進退恒なく、輕々しく衆を集むれども、生死を畏れて、其の害に任ぜざるものなり。庸主悖后奄人に目笑せられ、其の去留を憂へられざりしも、宜なりといふべし。

第十三章　寧宗論

第一節　趙汝愚の苦衷

小序　光宗卒倒して人心洶々たりし時、趙汝愚・韓侂胄等急に寧宗を擁立したり。次で汝愚は、知樞密院事より轉じて宰相に上り、韓侂胄は寧宗を策立したる恩賞を乞ひたるに、趙汝愚其の請に任せざりしかば、大に韓侂胄に怨まれ、遂に貶竄の不幸に遇うて衡州に客死したり。本論は、趙汝愚が韓侂胄の請を容れざりしは、實に苦衷の存せる所にして、人倫の大義を重んじたるに由るといひ其の然る所以を詳論したり。

趙忠定（趙汝愚謚して忠定といへり）定策の賞を行はざりしかば、韓侂胄趙彦逾に怨まれ、湖湘に竄死して、國は危亂に陷りぬ。或る人謂はく、漢の金日磾は宣帝擁立の封を受けず、丙吉は宣帝護養の勞を言はざりき、是れ君子の高致にして、小人に望むべからず、忠定をして、些少たりとも韓・趙二豎に酬ひて其の欲を充たしめたらんには、國安かりしならんと。嗚呼、是れ豈に忠定の心を知るに足らんや。

忠定の言に曰く、己れは貴戚の卿相たり、侂胄は皇后の親戚たり、國の爲めに勞を致すとも、賞を受く可からずと。是れ假托の言にして、心中實は功賞を圖る可からざる理由を藏し、然かも之れを口に出す能はざりしなり。

光宗は孝宗の内禪を受けたりとはいへど、其の實は孝宗を廢したるなり。寧宗は、生父たる光宗に背き、其の不孝の罪を正して、急に其の位を奪ひ、己れを扶立せる者をば、大勳勞ありとして之れに報いんとしたるは、信に天理人倫を破壞したるものなり。寧宗は、己れを推戴したる故を以て韓侂胄を德として之れを信任し、加ふるに無限の榮寵を加へたり。人は光孝の不孝を知れども、寧宗の不孝は光宗に倍せるものたるを知らざりき。忠定たるもの、此の大不孝を己れの身に忍び得べしや、又之れを君に忍ひ得べしや。寧宗の立ちし時、忠定は已むを得ざる勢に居り、之れを曲全するに由なくして、非常の事を行ふて寧宗を立てたるなれど、其の由來を考ふるに、事勢の必然に非ずして、當時宰相たりし留正の爲せる業なり（留正宰相の位に在りながら大事を決するの責を負はざりしなり。）當時廷臣は國を顧みずして逃れ去り、大學

は講學を廢して噪ぎ、都人は我れを忘れて驚き居たる際なれば、寧宗の立てるは事勢の必然に出づとは謂ひ難き筈なり。

光宗は父子の恩を絶ち、誠に人君たるに足らず。されど是れ、唐の太宗が玄武門に於て兄弟と鬪ひ、肅宗が父玄宗を長安の南内に禁錮したるに比ぶれば、罪なほ淺く、而して唐は之れが爲めに宗社を危うする程の害を被らざりしなれば、宋も其の害を受くること甚だしからざる理なり。其の時に方つて、外戚には、漢の呂氏、唐の武氏の如き陰謀を逞しうするものなく、皇族の中には、漢の七國、晉の八王の如き亂を構ふるものなく、光宗の皇后李氏は逆なりといへども外援なく、楊舜卿、陳原は姦なれども兵權を有せざりき。然るを、舉國狼狽して、一日も安んずる能はざるかの如く、忠定に迫りて、急に寧宗を立てしむるに至れり。是に於て忠定大に心を傷ましめたり。

冀ふ所は寧宗をして人たるの心あらしめ、父母に順ひて嫌隙を消し臣民に臨んで過を補ふに勤め、君父の非行を掩飾し、厚く孝宗に報いしむるに在り。かくの如くならば、寧宗も天人に對して疚しきこと無かるべく、己れも亦憂ひを去るを得べし。寧宗之れを務めんとはせず、己れを擁立せる者を德とし、父を廢したる者を功とし、大璧を盜賊の手より奪へるが如く、其の勳勞を表彰して天下に告ぐるに至つては、忠定は、寧ろ竄死するを榮とすべく、宋室は瀕危を免がれざるなり。其の故何ぞや。

君の有ると無きとは暫く措き、父子の倫に至つては、必ず滅ぼす可からざるものなり。桀無道にして、湯之れに代つて興りしが、猶ほ之れを慙德といへり。假に、父は桀たり子は湯たりとして、其の臣たる者、父たる人の無道を制したる功に誇つて榮利を求め、是れ慙づるに足らずと謂はゞ、是れ何ぞ禽獸を去ること遠からんや。褚淵、沈約の如き卑劣人すら敢て爲さゞる可きものを、君子たる者いかでか之れを爲すに忍びんや。夫れ忠定は自から禽獸たるを欲せず、決して君をして禽獸たらしめず、且又己れと事を同じうする勞苦の人を禽獸たらしむるに忍びず、是れ厚の至なり。されど、之れを人に告ぐる能はざる所以は、一たび之れを口を出せば、寧宗は全く進退に窮するに至るべければなり。故に、忠定は大に心を傷ましめたりと曰ふなり。

然らば忠定が留正に代つて宰相たりしは、何故なるぞ。答へて曰く、宰相は、功を賞するとて授けらるゝ官にはあらず。忠定既に寧宗を立つるに決して、非常の事を行ひ、危を扶け弊を救ふは、己れの任として辭するを得ざりしなり。光宗はなほ位を棄つる心なく、其の后李氏は驕横の悪あり、嗣主寧宗は童昏にして、姦邪は充滿せり。因つて、止むを得ず大任を身に負ひ、己れの生死を謀らざりし程なれば、何ぞ姦人に對して憚る所あらんや。彼れを措きて、他に老臣たる者を求むれば、則ち留正のみ。されど留正は、時艱に際しては江上に逃れ、事定まつて復た朝廷に列るが如き小人物なれば、到底宮廷を規正し、群小を畏服せしむるに足らざるは、誠に明白なり。留正にして、事に任へしめば、亦何ぞ倒行逆施、以て今日の如き非常の事を爲すに至らんや。留正一たび去つて復た朝に立てりと雖、唯員に備はれるのみ。然らば、朱子は如何ぞや。忠定已に急に朱子を進用し、共に宗社を圖れりと雖、未だ宰相たるべき資格と次序とを具へず。漸次に進むは、普通の事にして、賢者も受く可けれど、同輩を拔きて上位に急進せしむるは、英主の獨斷に待つ可くして、大臣自から專決すべき所に非ず、賢者も亦必ず受けざるなるべし。

己れ廟堂に升りて、後繼者を待たんとするには、惟だ己れ先づ相位に就きて、然る後、其の志を達し得べし。利を求むるに非ず、害を恤ふるに非ず、嫌をも避けず怨をも辭せず、昭々然として日月を掲げて行へるなれば、誰か忠定を難じ得るものぞ。

第二節　僞學の禁を啓ける元兇は蘇東坡兄弟なり

小序　韓侂胄、僞學の禁を令して學者を迫害し、趙汝愚・蔡元定等五十餘人其の禍に罹れり。本論は、僞學の禁なるものは、世人が篤厚の君子を輕侮するより起れる事にして、此の輕侮の風潮を刺激したる元兇は、實に蘇軾(蘇東坡)蘇轍(蘇潁濱)兄弟に外ならずと論じ、兄弟が實は不肖人にして君子の外貌を裝ひ、僞君子の標本となりて、眞君子を誹謗する道を世人に敎へたるものなる所以を說きたり。

小人、君を惑はし善類を害せんとして、其の口實なきを患ふるまゝに、朋黨といふ名を作り、之れを以て十分に天下の人を拘束するを得たり。漢唐以降、人亡び

邦衰へたるは、皆朋黨の禍に因れりしが、宋の季世に至りて、事態一變し、更に道學といふ名を設けたり。道學といへば惡聲にあらず、之れを口實として罪とするを得ず、道學と罪惡とは頗る相似ざる名なるが故に、又改めて僞學と名づけたり僞といふは、彼等の本心に非ず、其の同類相語りて誹る時には、固とより道學といひて、僞と言はざりしなり。

道學を罪名として士を殺せるは、劉德秀・京鏜・何澹・胡紘等の畫策せる所にして韓侂胄之れを主れり。されど、之れに始まれるに非ず、高宗の世、已に程氏の學を禁ぜんことを請へるものあり、孝宗に及んで、謝廓然は程氏と王安石とを竝べ論じ、其の說を以て士を取るを禁ぜんことを請へり。是れより後、益〻亂れて韓侂胄に至り、削奪竄死の法を加へて之れを迫害したり。蓋し其の毒たるや、數十年間を經て久しく積まれ、必ず一たび洩れざるを得ざる所のものにして、劉德秀が俄に起つて其の毒を播きたるには非るなり。

人各心ありて、要なきに人の事に干涉するものに非ず。道學の諸君子は、世人に害を及ぼせる事無きに、舉國の人狂呼して道學者を攻めたること此の如し。

其の餘波近世にも及び、江陵（明の神宗の初に宰相たりし張居正をいふ江陵の人なり）其の邪氣を踵ぎ、奄黨（明末の宦官魏忠賢を指す該れ東林の黨に由りて學者を迫害せり）其の猛威を重ねたること、人の知れる所なり。彼等が天下を惑はせて惡を賣る所以のものを察するに、强辨有力の者にあらずんば、此の如き迫害を敢てする能はざるべく、抑〻其の首唱者たりしものは誰ぞや。其の由來を考ふるに、蘇軾兄弟に始まり、其の惡は孔子を迫害したる向魋（卽ち桓魋）よりも惡しきこと論なし。

君子の學は、己れを律すること嚴なれども、利用安身の益なくんばあらず、物に臨んで正しけれども、自から和平溫厚の美あるを常とす。小人の傾妒するや、國事の可否に關せざらんことを求め、退居しては攷學せんとするに非ず、何ぞ道學の名を揭げて、君臣朝野を惑はせ、學者を排斥するに念ひ至らんや。蓋し君子は人心を正しうし風氣を端しうするが爲めに、必ず爲さゞる所の者有り。必ず淫聲艷色を遠ざくること、必ず苞苴賄路を拒むこと、必ず痛飲狂歌を絕つこと必ず詼諧調笑を屑しとせざること、必ず六博投瓊の戲れに晝夜を分たざるが如きことを許さゞること、必ず僧道遊客の嬉談面諛を受けざること等是れにして、此等

は皆、不肖者の耽つて自から恣にせんことを欲する所なり。此の不肖人にして一たび君子の中に伍すれば、君子たるべき體裁に束縛せられ君子も亦從つて之れを舉む、彼れ苟も君子の域外に出づれば、進んでは令譽を當局者に得る能はず退いては先生長者を以て士類の中に交はるを得ず。彼れ、君子たる束縛を脱して、思ひのまゝに行動せんことを焦慮するも、其の志を果たす能はざるに至り、遂に首を延べて遙に望み、誰か能く我が束縛を解き、君子たるの美名と厚實とを併せ得べき通法を敎ふるものぞと叫ぶなるべし。蘇軾兄弟は、此の一舉兩得の法を敎へんとして興り來れり。

父蘇洵は、少しく才有りて、文筆を狂弄し、韓愈の文則を採りては、吾れは韓愈なりといひ、孟子の枝葉を竊みては、吾れは、孟子なりといへり。蘇軾兄弟は、之れに益すに、博覽强記を以てし、之れを飾るに巧慧の才を以てし、六經を疎かにして、異端の佛說に泥み、一說を創めて曰く、吾が性に率ふは、卽ち道なり、吾が情に任かすは卽ち性なりと。かくて秦觀・李廌など無賴の少年を引いて羽翼となし、道敎佛說に近似せる漫言を雜へて談助と爲し、妖童を左にし、遊妓を右にし、花月の下に猖狂せり。而して周易の旨を測り、論語の膚を掠め、性命の影迹、治道の偏端を以て其の耽酒、嗜色、佚游、宴樂の私を飾り、昂然として、是れ君子の行にして道に合へるものなりと放言す。彼れ法言を言ひ、法服を服し、法行を行ふといへども、皆僞なり僞の名是れより生じたり。

是に於て、苟簡卑陋の士は、大に喜んで謂へらく、是れ我が束縛を釋きて、浩蕩の氣宇を自由ならしむるものなり、其の說に則れば、欲を遂け得べく、理に合し得べく、利を恣にし、名を成すを得べく、惟だ欲するまゝに、進んでは賢臣たり得べく、退いては師儒たり得べく、世人は皆仲尼孔子たるべくして且つ利を樂しみ得べしとかくて、人々爭ふて蘇氏の說を奉じ、一呼百集、群起して君子に敵すること仇讎の如く、道學を斥くること盜賊の如く、憚つて爲さず、といふことなきに至れり。故に謝廓然の之れを唱ふるや、程氏と安石とを竝べ論じたる程なれば、彼れが推戴せる所の者は、蘇氏に外ならざるを知るべし。

程伊川を視ること王安石の如くなるものは、蘇軾なり。謝廓然は曰く、士は當に道を信じて自から守り、六經を學となし、孔孟を師となすべしと。夫れ蘇軾も

亦六經を竊み、孔孟に托して己れの言行を飾り、實は狭邪の狎客を進めて、道の精微を極めたる達人なりとし、北里の淫詞を逞しうして、聖人傳心の經典なりとし且つ曰く、此れ誠なり、是れにあらずんば則ち僞なりと。抑、深刻の文を舞はして人を翻弄し、浮薄の語を放つて謔諧を試み、闇君を惑はして邪說を振ひ、其の流濫の極數百年に亙つて息まざらんとす。蘇軾兄弟の惡は、豈に堯舜を苦しめたる共工、驩兜の下に在らんや。

かくて、蘇軾兄弟が狐媚して天下を誘へるを念はず、後世衒奇の輩は、東坡巾（蘇東坡の著用せる頭巾にして其の圖は三才圖會に見ゆ）を著け東坡肉（東坡の好んで食したる豬肉なり東坡集に食豬肉詩あり）を食ひ、庖人縫人の技を學んで自から喜ぶものあり、辱人賤行も亦極まれり。眉山（蘇氏は眉山縣の人）の學熄まず、して君子の道伸びず、禍は人倫に至り、敗は國家に貽り、講學を禁じ書院を毀ち、踵をめぐらさずして、中國は淪亡し、人互に相食むに至れり。嗚呼、誰か興に道を衛りて邪惡を除き、其の書を焚きて僅存の人紀を救ふものぞ。然らずんば、其の害殆ど窮りなからん。

第三節　空論を以て勝たんと欲するの非

小序　寧宗の世に於て、韓侂胄權を弄して正義の人を迫害し、又猥に北伐を唱へて和平を破れり。論者、本を固うし邦を保つの大計を論じて頻に之れを難じぬ。王船山は、當時の論者が唯一端を取つて當局者を攻め、己れ自からは確乎たる經綸の策を藏せざりしを罵り、空論を以て一時の勝を求めんとするは宋代の通弊たりしことを概論せり。

言論は勝つを期するのみならば、是れ難事にあらず。是が非に勝ち、直が曲に勝ち、正が邪に勝つは、常勝の勢を執り、義を計つて義存し、名を建てゝ名正し、何ぞ勝たざるを患へんや。故に其の言論は、屈する所なく、或る時は用ふる能はずして反つて禍を得る事あらんも、其の言天下に傳へられ、天下之れに感じ、後世に傳へられて後世之れを誦するに至る。それ殆ど貞勝なるもの乎。貞勝なれば、勝たざるを患ふるなきなり。然りと雖、勝つといふは彼れに勝つなり。彼れ非にして之れに勝たば、則ち勝つ者是なり。彼れ曲にして之れに勝たば、則ち勝つも直なり。彼れ邪にして之れに勝たば、則ち勝つ者正なり。此の如き勝は僅に

彼れに勝てるのみにして、貞勝には非ず。

兩說を立てゝ其の得失を衡るは、定あるものなり。一事に就て其の初終を計るは、恒あるものなり。元來定なく恒なく、唯事の一端について言論の勝を求むるとも、是れ定論とは謂ふべからず。定論とは、一方に偏せずして中に居り、何事にも適用せられざるは無きものにして、所謂貞勝を得るものなり。故に論者之れを以て天下の危きを扶け、其の傾ける定め、確乎として守る所あり、推して之れを永久に行ひ得べく、一時の勝を求めずして天下後世に感誦せられ、其の言一々實あり、唯一時の是非曲直正邪を辨折するにあらずして、之れを永遠に施して通ずべきなり。

宋南渡以後、爭ふ所は和と戰とのみ。秦檜の世に當り、戰を言ふ者が恥を雪ぎ故土を恢復するを以て大義とするは、則ち秦檜の邪に勝つて餘あるものなり。韓侂胄の世に當り、和守を言ふ者が本を固うし邦を保つを以て本計とするは則ち韓侂胄の邪に勝つて餘ある者なり。是に於て君子たる者餘力を遺さずして之れを論じ、是れを以て權姦に忤らひ罪罟を獲たり。而して其の勝つ所以の言理は、堂々として何人にも承認せらるべき所なり。乃ち其の言の如くならしめ秦檜を退けて論者に兵柄を授くるとせば、果して能く恥を雪ぎ故土を恢復し得たるならんか。是れ不可能ならん。韓侂胄を退けて、論者に國政を授くるとせば、果して能く本を固うし邦を保ち得たるならんか。是れ不可能ならん。何を以て其の及ばざるを知るか。

論者は秦檜と韓侂胄とに勝つに至つて止まる。既に勝て後、茫然として勝てるの實を有せざるなり。秦檜の說を以てしても韓侂胄に勝つを得べし、秦檜は決して固本保邦を要求せざりしにあらざればなり。韓侂胄の說を以てしても秦檜に勝つを得べし、韓侂胄は決して雪讎復宇を主張せざりしにあらざればなり。

秦檜を排斥して韓侂胄を得、韓侂胄を排斥して史彌遠を得たり。論者の言は理なきに非ず名なきにあらざれども、其の實に於ては、却て義に合はず名に稱はざるを如何にせん。故に秦檜死して和議破れ、苻離の戰起り、韓侂胄出でざる前に宋軍沮敗したり。韓侂胄誅せられ、兵已に罷み、宋は日々に坐敝して遂に亡ぶ

るに至れり。是れ他なし、論者唯當國者の非を目擊し、遽に之れを排斥せんことを思ひ立てるのみにて、暫く熟考して、扶危定傾の實政を計畫し、當國者を心服せしめ、彼れが嘲笑を招くが如き失敗なきを期せんとするほどの深謀を立つるもの一人も無かりしが故なり。不世の功は、豈に空論を以て一時の勝を求め、坐して之れを致し得るものならんや。韓侂胄北伐の謀を唱へて、岳飛の恤典行はれ、秦檜の惡謚定まりて、史爾遠講和の說を修め、而して趙汝愚の孤忠顯はれ、道學の嚴禁弛みたり。是れ大に人心を快うするに足るべきものなるに、人心危惧を益し、徒らに言論の勝を求めたる者全く影を潛めたり、天下亦何ぞかゝる淸議を恃まんや。

嗚呼、宋は仁宗より以後、言論を以て相勝つの風習、愈〻墮落し、因つて以て國を傾けたりしは、皆論者の衒氣に本づけるなり。始め君子を以て小人に勝つを求め次で小人を以て反つて君子を傾け、次で君子の徒すら起つて相勝たんと欲し、次で小人も亦相勝つて相傾くるに至りぬ。小人が互に起つて相傾くるに及んでは、則ち名義を竊み以て大に相反戾し、宗社生民を憂へんともせず。其の竊めるは、前に君子が執つて以て小人に勝ちし所のものなり。言何ぞ容易ならんや。

言ふて內省せず、寧ろ己れの爲めにする程ならば、是非といひ曲直といひ正邪といふも、畢竟相去ること遠からざるものなり。言と義と合致せずんば、義は外に在り、何人も之れを利用し得べき筈ならずや。故に君子は言の難きを知り、之れを言ふを憚り、決して一端をのみ標準となし、之れを以て永遠の大訓となさんと欲するが如き事なし。退て熟慮し、密かに斷行し、事無くしても藏する所あり之れを用ふれば實行する所あり、至是至直至正の經綸を蓄へて、輕々しく言はず言へば必ず之れを行ふを期す。道己れに備はつて、功は欲するがまゝなり。かくて姦邪も攻むる能はず、吾を傾けんとする者も竊む能はず、是れ貞勝たる所以なり。

第四節　史彌遠の姦を論ず

小序　史彌遠は、寧宗・理宗の朝に當つて政を執ること二十六年の久しきに及

び、其の初め、韓侂胄を誅する謀を立て、次で理宗擁立の策を定め、終に一時の君子を貶斥して醜名を播き、秦檜・韓侂胄・賈似道と共に南宋の大姦を以て目せらる。王船山は、彼れが行事を論じ、同じく大姦なりとはいへ、他の三凶に較べて、稍〻取るべき所あり、畢竟姦人を御すると御し得ざるとは、在上者の明不明に在りと謂へり。

唐の中葉、禍亂屢〻作りしが、武宗・宣宗の世、猶ほ自から振ひ起つて外侮を禦ぎ内政を修め興るべきの幾ありき。宋は則ち南渡以後、孝宗爲す有らんと欲して能はず、次で日々に疲れ、以て亡ぶるに至りぬ。其の主の狂惑は、唐の僖宗・懿宗の如く甚しからざりしも、惟だ當國の大臣、政權を握れる者、姦を以て相傾け、又以て相嗣けり。秦檜・韓侂胄・史彌遠・賈似道は、踵を接して惡を爲し、其の害次第に甚だしきを加へ、國に效すを思ふ者とては、一人だも其の中に在らざりき。但し同じ惡人の中にても差別あるを知らざるべからず。

春秋の法は、情を原ねて罪の差等を定む、同一惡にして罪殊なり、同一罪にして法殊なる。此れを知つて然る後、小人の心を服すべく、惡も咎を分つ所なかるべし。君子、の小人を馭するや、處置宜しきを得ば、其の惡を弭めて之れを利用するを得べし。衡は定まり有れども權は移すべし、權移すべからざれば、則ち衡も準を爲す能はざるなり。然らば則ち史彌遠を取つて之れを他の三凶と同一視するは不可なり。又韓侂胄・賈似道の二豎を取つて之れを秦檜と同一視するも亦不可なり。秦檜は、機深く力鋭く、情測るべからず、その願欲日に進んで終止する所なし。故に俘虜となれる身にてありながら耆舊老臣を凌ぎ、一人の力を以て朝野の公論を挫けり。已に己れに反抗するものを誅滅したるなれば、若し己れの業を授くべき子有りて、且つ天若し假すに年を以てせしならんには、江南の領土は宋の有にあらざりしならん。これ大惡元凶、是非を以て概論すべからざるものなり。

韓侂胄・賈似道は、狂邪の小人のみ。宮闈の寵に託し、間に乘じて權を竊み、心に計營する所は、納賄漁色驕蹇嬉遊の中に出でず、上は國の危きに瀕せるを知らず下は身の保ち難きを知らず、外國と爭を開き、重斂を以て民を虐ぐるは、皆其の本志に非ず。佞諛の輩彼れを嗾かして、僥倖の營利を分ち、彼れも亦愚にして覺らず、姑らく之れを以て戲れと爲せり。則ち楊國忠・王黼の類にして、固とより秦檜

の陰慘なるに如かざるなり。然れども、之れを以て人の國を滅ぼすには餘ありといふべし。

史彌遠に至つては然らざるものあり。先づ論ずべきは、立君の權を弄し、私怨を以て濟王竑を黜けて理宗を立てたるは、寧宗の意にあらざりしなり。されど寧宗も亦之れを致し、濟王も亦自から之れを招きたりと思はるゝ事情あり。曾て仁宗が英宗を立てたる時、密に韓魏公と謀りしが、韓公は其の名を誦言せずして仁宗の獨斷を待てり。高宗の孝宗を立つるや、秦檜の跋扈を以てしも、其の謀に與るを得ざりき。寧宗は則ち之れを史彌遠に一任して可否を加へず、儲君の位は、史彌遠の欲するまゝに移動し得たるなれど、彼れ密に余天錫・鄭清之に囑して先づ儲君たるべきものゝ德性を考察せしめ、王莽・梁冀の如く强て幼主を立てて國を盜む素地を作らんとはせざりき。固とより己れの害を遠ざけんとは欲したるなれども、亦國の安きを念はざるにあらざりき。彼れが擇び立てたる理宗の靜肅なりしは、固とに彼れが排斥せる濟王竑の躁急なりしよりは賢なりき是れ史彌遠の心事、聊か條理の原ぬべきものあるなり。次に論ずべきは、韓侂胄の首を函にして女眞に媚び、國威を損して邊防を弛めたる事なり。然れども唯侂胄を誅したるのみにて將帥に及ばず、預め密に謀る所ありて、固とに未だ北顧の憂を忘れざりき、是れ秦檜が人の宗族を陷殺し、盡く諸帥の兵を解き、大に軍政を壞り、治平を粉飾し、孝宗の時に及んでも終に振ふ能はざらしめたるに同じからず。更に論ずべきは、李知孝・梁成大を臺省に進めて、眞德秀・魏了翁を攻めしめたる事なり。眞・魏二公の史彌遠を進めたること厚かりしが、濟王竑が皇太子を罷めらるゝに方つて、二公は淸議を執り、史彌遠を窮地に陷れたるが爲めに、史彌遠忿激して反噬を試むるに至りしなり。禍福生死は、瞬間に決す。內に省みて疚しからざるものに非ずんば、決裂して反噬を逞しうせざる能はず。但し堅く一念に執着して君子と爭ひ、故なくして人の國を空しうするにはあらざること明なり。

故に史彌遠は、自利の私と利國の情と、交〻胸中に混じ、利國の情は自利の念に若かざりしが爲めに、遂に小人たるに了れり。公平に評すれば、呂夷簡・夏竦の間に在りといふべし。主愚にして志を逞しうするを得たるが故に、惡は呂・夏よりも

甚だしとはいへ、彼の三凶に較ぶれば、猶ほ愈れりとすべし。

君子の道は、人を以て人を治むるものなり。若し其の人ありて治むれば、誅賞の法平正なるべく、其の人治めて世人是れに從はゞ、統御の道行はるべし。然らずして一往の情に任せて天下を治めんとすれば、到る所に當然殺すべき筈の小人を發見し、その反激に逢ふて朝廷の紛亂を免かれざるならん。此れ漢唐以來亂亡の階梯なり、何ぞ尚ぶに足らんや。

故に明君上に臨御し、大臣正を持して之れを贊け、罪を酌量して刑を明らかにすれば、則ち秦檜の如きものも、霜を履んで堅冰至るの戒を謹むべく、女眞より來歸して巧に反間を行ふに於ては、その上刑を受くること宋齊愈の下に在るべからず。蓋し其の陰鷙の才は、抑ふれば自から伸び、遠ざくれば自から近づき、嚴を以て制せんとすれば其の慘烈の毒手に敵し難く、柔を以て和らげんとすれば、却て其の術策の中に陷るべき程なれば、上刑に服するに非ざれば之れを抑へ難しとす。韓侂胄、賈似道の如きは、世々其の人に乏しからず、權を授けずんば、姜特立、張說と均しく佞幸者たるのみにて、天下の元兇たる能はざるなり。史彌遠の如きは、之れを戒めて正しからしめ、之れを導て順ならしめ、其の威福を削り、其の勤勞を賞せば、邪心侈らずして、多少の效を收むべきものにして、追放せずとも、宗社の害を爲すには至らじ、之れを馭するの術は、其の人に存するのみ。秦檜檀にして趙鼎、張浚之れを過むる能はず、韓侂胄專にして趙汝愚、留正之れに勝つ能はず、賈似道横にして舉國詰る能はざりしは、君子窮したればなり。史彌遠の世に當つて、君子未だ窮せざるに、自から進んで窮したりしは亦惜むべきかな。

第十四章　理宗論

第一節　金國を夾攻するにつきての對蒙古策

小序　理宗の紹定四年、蒙古金國を侵し、使を宋に遣はし、道を假り且つ兵を會せんことを求む、翌五年、蒙古の使者王檝來つて、再び夾攻を議す。京湖制置使史嵩之之れを奏聞し、朝臣多くは是の機に乘じて金國に復讎すべきを唱へ、理宗これに從ひ、史嵩之をして蒙古の請を許さしめたり。六年、金主守緒蔡州に走り、翌端平元年、宋・蒙古聯合して蔡州を陷れ、金こゝに亡びぬ。王船山之れを論じ、蒙古が夾攻を求めたるに對し、應ぜんか拒まんかの決を取るは、當時に在つては至難なりしこと疑なく、辭令を巧にし、決心の固きを示して、婉曲に拒絶するを上策としたるなれど、如何に壯語すとも、空言は畢竟寸効なし、當時の南宋は君愚臣姦の衰況に沈み、蒙古に對して堅確なる處置を執る能はざりしは己むを得ざる所なりと謂へり。

女眞と結んで契丹を滅ぼし、蒙古と結んで女眞を滅ぼし、反つて以て自滅したるは、符券を合はすが如し。明鑑を目前に懸けながら覺る能はざりしは、理宗君臣の愚癡す可からずといふべく、古今天下を通じて、之れを笑はざるものあらざるなり。然りと雖其の位置に立ちて考ふれば、理宗の之れに應ずる處置も亦難しと謂ふべし。

女眞と結んで契丹を滅ぼしたるは、女眞が之れを爲したるに非ず。女眞は援を宋に借るの情なく、亦遽に宋を呑むの志なかりしなり。童貫が趙良嗣の言を聽き、間道より往て約を結ばしめたるに因つて、女眞の飽くを知らざる欲望を啓きたるなり。宋をして關を閉ぢて固く守らしめば、女眞も宋の短長を測り以て凌奪を思はざりしならん。且つ宋の契丹に於けるや、君父の讎なく、援けて之れを存し、以て外蔽とするも、亦一策なり。之れを慮らずして自から之れを挑みたる咎は免かれんやうなし。

蒙古と結んで女眞を滅ぼしたるは、宋未だ往て迎ふる心あらず、而して蒙古の使者王檝自から來れるにて、其の勢異れり。蒙古の女眞を蹂躪するや、女眞は聲

を聞て震ひ恐れ、戰へば則ち靡き、蒙古は左馳右突、欲して得ざるは無く、將に黃河を渡つて女眞を殄滅せんとするに方つては、豈に宋の夾攻を待つて、而して後成功を期すべきものならんや。然るに間道より使を遣はして、夾攻を宋に求めたりしは、其の志知るべきなり。女眞已に屈服したりしかば、蒙古は次で宋に垂涎し、故さらに使を送つて宋の內情を探り、宋をして諾せんか拒まんかの兩途に迷ひつゝ、自から必敗の內情を曝露せしめんとするに在りき。故に、宋の之れに應ずるや亦難しと謂ふなり。

宋若し約を許さずして之れを拒むとせんか、必ず之れを拒むの辭あるべく、辭あれば之れを決行するの實なかる可からざるなり。拒むに理を以てせずんば則ち辭先づ屈すべし。辭屈せずとしても、之れを決行せずんば、爭を挑むの媒たるべし。初めより氣萎へて辭を盡すを敢てせず、唯應へて、金は吾が與國なり、世々好みを通ぜり、盟は冷かなるべからず、今窮して我れに依る、固とに其の危きに乘じて利を圖るに忍びずと謂はんには、是れ我が屈したるなり。曾て我が君父は金に囚死し、我が宗社は金に轉覆せられ、我が陵寢は金に發掘せられたるに、今や金との盟約を脅かすに忍びざるを以て拒絕の證となすとも、抑、誰をか欺かんとはする。明らかに女眞を恃んで外護となし、以て須臾の禍を緩うせんと欲し、陽には危きに乘ずるに忍びざるに託し、以て志義を誇るとも、我が怯懦の情は蔽ふべからずして、蒙古が我れを謀るの志益堅かるべし。則ち辭先づ屈して勢も亦隨つて屈するものなり。是れ不可なり。故に史嵩之も亦如何ともすべき無く、寧ろ童貫敗亡の轍を蹈むとも、已むを得ず夾攻の約に從はんとするに決したりしは、昏庸の臣主、勢免かるゝ能はざる所なり。

誠に之れを拒がんと欲して、其の辭を善くせんとするには、次の如く應ふるを可とす。金は吾が世讐なり、往きに我れに不善の臣あつて、其の詐誘を聽るし、之れに兵力を貸して遼を滅ぼしたり、金は燕雲を擧げて我れに歸さんことを約し乍ら、遼亡びて猝に盟を破り、我が不備に乘じて吾が宗社を傾けたり、吾れ之れと共に天を戴かざること久し、唯だ我れ挫折の後を以て、國本未だ固からず、姑く之れに和を許し以て吾が民を休めたり、而して之れを今に用ふるは、數十年の休養を經たる今日に於て、正に師を率ゐる武臣の力を悉くし以て必ず前恥を洒がん

ことを思へばなり、然るに天は蒙古に力を假し、金人を驅つて河を渡らしめ、死を汴蔡に送らしむる事となれり、今河北の地は漸く蒙古の版圖に入り、河南は吾が陵寢の地たるが故に、我れ固とより之れを吾が手に收め、金帝守緒を俘にして之れを祖廟に獻ぜんと欲す、河北を定むるは、蒙古に在つては餘力あり、我れを待たざるべし。河南は固とより我が運籌の中に在りて、蒙古の手を煩はす要なし、吾れは吾が力に應じて進み、各〻得る所を以て疆域となし、金賊全く亡ぶるに至るを待つて、互に封域を接し、然る後、使を遣はし好を修め、睦隣の盛事を講ぜん、今方に各〻中原の事あり、未だ幣を用ふるに遑あらず、今信使の來るに會し、欽んで嘉問を酌み、敬んで命を聞けり。是の如く答ふれば、我が義已に伸び、彼れの姦も擲たれて、辭屈せざるべし。而して實は之れを決行せんこと極めて難事なり。

狡猾にして欲を遂げんとするの蒙古は、豈に虛聲を以て畏服せしむべきものならんや。志定まらず、膽張らずんば、固とより吶々として之れを口にさへ出す能はざるなり。

此の時に方つて、宋誠に如上の言を實行せんと欲せば、豈に全く恃むべきものなからんや。童貫が契丹を夾攻したりし時には、劉延慶の如き弱將と共に、坐食の軍を率ゐ、少しく入つては少しく敗れ、大に入つては大に潰え、敗殘の遼すら競起して之れを笑へり。當時仰望して、危亡を支へんことを托すべきものは、种師道の加き衰老無能のものなりき。理宗の世に及んでは、時勢屢〻變じたり。岳飛・韓世忠・劉錡・吳玠諸將の武威は秦檜に挫かれ、成閔・郭宏淵・王權・張子蓋は軟弱に慣れ、韓侂胄の蹶起に會ふて忽ち仆れたり。侂胄は武人を進むるを樂んで重く之れを奬めたれば、虔矯の如きも奮勵する所あり、孟宗政・趙方・孟珙・余玠・彭大雅の輩起り、兵も將も用ふるに足り、戰守共に逆し、淮襄楚蜀の間に力戰し、衰殘の金國に對するのみならず、なほ蒙古に抗敵し、宋將に亡びんとするの際に至つても、西川に戰つては、忽ち陷れられて忽ち之れを復し、襄樊を守つては、愈〻困んで愈〻堅かりき。呂文煥・劉整は蒙古に降るに及んでも盛に奮鬪し、蒙古の將軍阿朮・伯顏に率先して進みたり。若し宋の君をして至闇ならしめず、宋の宰相をして甚姦ならしめざりしならば、宋は東南の力を盡して、分崩の女眞を撲滅して、汴洛を收むるを得たりしならん。其の奏功の著るしきは、昔日の怯懦極りなき宋軍と較べて

強弱相去ること實に遠かるべきを察するに足れり。かくの如くんば、直言を以て蒙古に應へ得べく、之れを實行せずして敵に笑はるゝを患ふるを要せざるなり。

國に君たりしは理宗なり、政を統べたりしは史嵩之なり、之れに繼げるものは賈似道なり。蒙古に通ずるも亦亡び、蒙古を拒んでも亦亡ぶべかりしなり。いづれにしても亡ぶべき形勢なりしとせば、辭を善くして應へんと欲しても、固とより應ふべきなく、已むを得ずして姑く之れを許しても、童貫・王黼の先例を證とし、他日の敗亡を招かんこと昭々として明白なりき。當時の大勢を通考すれば固とに亡びざるべき道ありしなり。而して唯蒙古會師の約を拒み、空言を以て宋を救ふべきには非ざりしことを知らざるべからず。空言は、氣誇つて其の實なきものなり。

第二節　言論の喧しきは士氣の盛なるにあらず

小序　南宋衰亡に傾きながら、當局者の非事を難ずる論客相次で現はれ、理宗の世にも、屢〻其の例あり。王船山之れを罵り、濫に言論を弄するは、宋代の通弊にして、言論囂々たればとて、決して士氣倡なりとは謂ふべからず、寧ろ衰世に方つて其の甚だしきを見る、南宋の末に至つて、言論いたづらに喧しかりしも亦其の類なりと謂へり。

世降り道衰へて、士氣の說あり。何人か先づ之れを唱へ、人々相率ゐて之れに趨り、而して戒むるを知らず。天下に於て益なく、風俗に於て善なく、反つて激して禍を啓き、士に於ては、或は死し或は辱しめられ、辱は死よりも甚しからんとす故に士氣を以て稱せらるゝ者は、士の糞稗にして、嘉穀是れが爲めに荒む。

夫れ士には、志あり行あり、守あり此の三者を修めて士道立つ。志を以て氣を帥うれば氣正し、氣を以て志を動かせば志驕る。行を以て氣を舒ぶれば氣達し氣を以て行を鼓すれば行躁がし。守を以て氣を立つれば氣剛なり、氣を以て守とすれば、守窒がる。氣を養ふものが、之れを節することなくして、亟かに物に加ふるは、是れ助長するなり、天下の禍を激し、風俗の衰を導き、還つて自から死辱に罹る、かくの如きは、習氣たるのみ。

氣は、人各〻是れ有り、當體の中に具はつて、心の使ふ所に從ひ、而して互に相貸さ

ゞるものなり。相貸さずといふは、己れの氣は、人に動かされて增すことなく人の氣は、己れの氣溢れて之れを鼓動し、之れに由つて伸ぶるものにあらざるをいふなり。所謂士氣とは、衆人の氣を合して氣と爲すものなり、豈に衆氣を合して氣と爲し、而して其の理を得るものあらんや。今老少弱壯饑飽勞佚各、相異れる數十百人を合し、闃然として人と相搏たば、敵に破られざるもの鮮し。故に氣なるものは、獨を用ふべきものなり。

士の君に事ふるに於ても亦、天下を以て志となし、道義を以て行となし、生死を輕んじ貧賤を忘るゝを以て守となす。君父の危きを憂へ、彝倫の破るゝを傷み生民の苦を恤み、忠賢の黜けらるゝを憤るに於ては、上は君を犯し、下は權姦の大臣に抗して以て直を求むべく、則ち一は一と相當り身を捐てゝ得失を爭ふべきなり。草莽の身を以て天子の尊嚴を冒す嫌ありとも、氣は固とに盈てりと謂ふべし。然るに獨りを以てしては勝たざるべきを憂へ、衆を集めて義を唱へしめ以て君に誇らんとするは、是れ先づ餒えたるなり。己れにては足らざるが故に闃然の衆氣を利用せんとす、如何んぞ堅忍不拔の義を建つべけんや。自からは名高しといひ、勢盛なりと思ふべけれど、名と勢とは初めより定處なく、唯强くして力ある者が權に乘じて勝地に居るが故に、己れは死と辱とに苦しめられ、權姦益、惡を逞しうして天下の害を爲すに至る。是れ豈に士氣の浩然たるものと爲すに足らんや。

宋には此の弊多し、能く知らざる者は、之れを以て士氣昌なりと考ふ、實は其の氣已に朽ちたるを知らざるなり。李綱が廢せられたる時、學宮の士、闃然として一たび起り、史嵩之が宰相の職に復せる時にも、闃然として再び起りぬ。史嵩之を攻擊したる徐元杰、劉漢弼が毒を以て死するや、蔡德潤等闃然として三たび起り、丁大全が董槐を逐ふや、陳宜中等闃然として四たび起れり。凡そ其の言ふ所は、皆國を憂へ讒を疾み、彝倫を整へ風化を正しうするものなり。理と氣と相待ち相助くるは、人の獨心に存し、此の心を推して、正は邪に勝つを得べし。然るにかくの如く群競して起つ者の志は、果して皆眞に國を憂へ、姦邪に勝たんと欲するものなりや、其の行は、果して皆孝信を守り、以て風化を匡正するに足るものなりや、其の守は、果して貧賤生死を意とせず、己れの身を以て諸姦の貪濫を制する、

に足るものなりや。首唱者は或は然らん、之れに附和雷同する者の十中八九は保證の限に在らず。諸姦は飛鳥の林に集まれるものゝ如く之れを輕んじ庸主も群蛙の夜に喧しきが如くに之れを厭ふなるべし。されば此の如くして、國士の名を得、自から清流人士の間に誇るとも、固とより傾危の禍を救ふに足らず、國家も亦何ぞ此の如き士あるを賴まんや。

政の治まらざる、君の不德なる、姦の止まざる、而して禍の迫れるを救ふと能はずして、たゞ大聲之れを叫ぶのみなれば、下層の衆民も上を怨詛するに至り、醜態强敵に知られ、群情動搖して、上に親しみ長者の爲めに死するの心を失はしむべし。斯の如くんば、國勢の衰ふるも、風俗の薄きも、實にこゝに生ずべきなり。

遊談の習ひ長ずるに任せたる末は、必ず其の禍を受くべき筈なり。蒙古が國都臨安(杭州)に入り、民を驅つて北に徙らしめ、人は足を凍らせ指を墮し、啼饑して食を原野に求むるに及んで、曾て一人だも此の蠕蛄の生を捐て、孔子の堂に就き乾淨の土を擇んで以て死所と爲さんとする者なかりき。則ち曩日の浮氣湧興山搖ぎ川決するが如き勢を示したるもの、今いづくにか往ける。

先王の士を造るや、飲射禮樂を以て之れを教養し、士行を篤うし、士氣を安らかならしめ、深く自から賴む所あつて然かも衆と和協し得べからしめたり。故に暴君逆黨も之れに非道の刑戮を加ふる能はざりしなり。戰國の士氣張つて秦王政の坑を來たし、東漢の士氣競つて宦官の害を致し、南宋の士氣暮しうして蒙古の辱を招けり。誠に先王の士を育せる法を以て士を待ち、士も亦先生の士を育せる法に由つて自から育せば、豈に此の如きに在らんや。詩に曰く鳶飛戾天(シデリニ)、魚躍于淵(ニ)と。各其の所に安んじて、人を作るの化成るべし。魚下に亂れ、鳥上に亂るれば則ち網罟興る。氣機發すれば、中止する能はず、何ぞ輕々しく氣を言ふべけんや。

第三節　江漢上流の險を棄てゝ南宋亡びたり

小序　理宗の晩年、賈似道權を弄し、忠良を讒害し、蒙古の入寇を防ぎて姑息の和を結び、大江・漢水の上流、巴蜀の險要を固守する能はざりき。王船山の論に曰く、江東の恃むべき險要は、江淮にあらずして、實は大江・漢水の上流に在り、南宋は、是の險要を棄てゝ、自滅の運を速めたるに同じく、其の罪の歸する所は賈

似道に在りと。

險を恃むは亡ぶる道なり。險を棄つるは、尤も必亡の道なり。險を恃んで亡ぶるは、險が之れをして亡ばしむるに非ず。人を得ず、政非にして、民心離れ、兵力脆く、金粟冗費せらるれば、險も守る能はずして險なきに均し。險を恃んで亡ぶるは、亦險を棄てゝ亡ぶるに同じ。易に、王公險を設け以て其の國を守るといへば、險の棄つべからざるや明かなり。

故に國を守るものは、險を知らざるべからず、險を知るとは、險と非險との本領を明らかにするをいふなり。一山の高きもの、一水の深きものありとも、以て險とするに足るにあらず。高峻の要地にして、廣濶深奥の地を控へ、手足を以て頭目を衛るが如き勢を成すものにして、初めて之れを眞險と謂ふなり。善く攻むる者は、必ず之れを爭ひ、善く守る者も亦之れを守るのみ。

孫氏以來、東晉・南宋に及び、江東に因つて國を立てたる者、皆百餘年を保ちぬ。長淮・大江は其の障蔽となり、由つて天塹の名を得たり。其實を求むるに、長淮・大江は未だ以て險とするに足らざるなり。曹魏は濡須に臨んで退き、石勒は壽春に至つて返り、苻堅は淝水を渡つて奔り、拓跋は江水に飲うて止まり、周の世宗は滁陽を破つて罷め、完顏亮は采石を窺つて潰えたり。是等は、已に長淮を全有して半ば大江の險を奪へるものなれど、金將兀朮に至つては、直ちに建康を擣き馬を金山に立て、東は四明を陷れ、南は豫章に馳せ、全く大江を越えて江東を蹂躪し遂に其の地に安居する能はずして北に走れり。蓋し大江は一衣帶水のみ、渡過に難からず、重關の要害もなく、以て江東の險とするに足らざるや明らかなり。江東の險之れに在らずとせば、則ちこゝに國を立てゝ拔く可からざりし所以は別に存すべき理なり。

昭烈漢中を有して曹仁乃ち退き、劉宏襄漢に鎭じて瑯琊乃ち興り、桓溫李勢を縛して氐羌敢て內犯せず、張浚荊襄を督し、二吳秦鞏を爭ふて、女眞其の南窺を息めたり。之れに反して、秦巴蜀を滅ぼしてより、捍關破られ、鄢郢陷り、楚は吳に走つて亡びたり。魏は蜀漢を滅ぼし西陵に迫り、王濬因つて以て師を興して東を指し、而して孫氏亡びたり。字文氏は蕭紀を滅ぼし蕭巋を下だし、而して隋人南渡の師長驅して憚る所なかりき。宋は孟昶を俘にし高季興を下だして、南唐を

滅ぼすこと枯木を摧くより易かりき。

是れを以て驗するに、江東の險は楚に在り、楚の險は大江と漢水との上流に在り。大江を恃むは、恃む所を誤れり、上流を棄つるは、依る所を棄つるなり、得失の本旨未だ之れに違ふものあらざるなり。蓋し吳越は末なり、江漢の上流は源なり。攻者より言へば、源より末に至るは順にして、源を得ずして末に求むるは逆なり。應援相踵ぎ、芻糧相濟ひ、甲仗車牛相輔くるに於て、順道を取れば、軍中途にして困乏を感ずる憂なし。順にして下れば攻め易く、逆にして上れば退くこと難し。進攻に易く退却に難きを知れば、人々死を致す心あり。是れ大江を横ぎつて渡る者の成功無く、高きに因つて下る者の勝算を得る所以なり。守者より云へば、頭を擊たるれば手足應じ、手足制せられては頭援くる能はざる勢を成せり。大江と漢水との上流は、芻糧を供し、材勇を生ずる所なれば、吳越已に糜爛すとも、巴蜀湘粤なほ險に阻して爭衡すべく、上流已に沈淪すれば、則ち吳會越閩は魂奪はれて坐ながら斃るゝなるべし。蘇峻石頭城に據りしが、陶侃溫嶠江湘の義兵を率ゐ、之れを掩取すること籠鳥の如くなりき。侯景臺城を陷れしが、王僧辯陳霸先は脆弱の粤人を以て、之れを網擧すること游儵の如くなりき。江漢上流の險は千里の外に遠けれども、下流江東に於ける戰勝の關鍵はこゝに在り。是れ古今前例の示す所、悉く同じからざるはなし。

然らば則ち宋は、理宗の世に當つて必ずしも亡ぶ可からざりしに、險を棄てゝ自から亡ぶるに至れり。これ賈似道の罪にして、誅しても尙ほ餘ある所なり。彼れ款を蒙古の拖雷に通じ、之れに背て寇を招けるのみにあらず、賄賂を以て軍將を望み、柔媚を以て兵權を掌り、抗直を以て仇讎となし、愛憎を以て刑賞を爲せり。是に於て余玠死して川蜀の危支へ難く、劉整叛きて川蜀の亡ぶるや決せり呂文煥を援けずして、敵軍の陽邏より大江を渡るを過むる能はず、臨安已に破れ江南瓦解するに及んで、揚州の守なほ巋然として存せるも、江淮の天塹は以て江東を固うするに足らざりき。是れ勢の趨かざる所は、存亡の紐に非ること明らかなり。

故に險を知るは、天下の大險を知るなり。一山一水眉目の間に在るものを見て恃む可しと爲し、之れを驕玩するにはあらず。南を守るに方つて、漢中巴蜀を

失つて江湘を孤立せしめ、北を守るに方つて、朔方雲中を失つて河北を危うせしめ、北は南の資糧に倚るべきに徐泗の漕運通ぜず、南は北の捍蔽を恃むべきに、相魏に屯練の兵なし、かくの如ければ英主と雖、中國を撫有する能はず、況んや中材にして非運に際會せるものをや。故に險は恃むべからず、就中棄つべからずといふは、千秋の永鑒なり。

第十五章　度宗恭宗端宗祥興帝論

第一節　度宗の暗愚と賈似道の姦

小序　寧宗は韓侂胄に立てられたるを恩とし、理宗は史彌遠に立てられたるを恩とし、度宗は賈似道に立てられたるを恩とし、いづれも權姦の專横を招き國政愈〻亂れたり。王船山之れを論じ、權臣が天子の嗣立を助けて、私恩を賣らんことを圖るは、國の大禍にして、度宗の如き暗君立ちて南宋益〻傾きしが其の禍の本づく所は寧宗に在りと謂へり。

宋は理宗の末造に及んで、必亡の勢を示せり。然れども嗣立の君として、恥を憤つて自から强うし、固く衆志を結び、劉繼元が城に據つて堅守し、屢〻攻められて下らざりしが如くならしめば、猶ほ賴むべき所あり。さなくとも身を跳らして出で、潰散の卒を收めて、忠義を勵まし、苻登が死を誓つて姚萇を搏ちたるが如くならしめば、猶ほ中原生人の氣を存すと爲すに足れり。然るに、一日の安富を偸

み、擁立せられし私恩を懷ひ、國を權姦に委ね、席を降つて稽顙し、恬として怍づるを知らざるに至れり、而して後、趙氏の宗社、瓦解灰飛して、挽回する能はざりき。嗚呼度宗の君たりし事蹟を迹ぬるに、蓋し周の赧王、晉の惠帝の流なり、安らかに家に死するを得たるは、猶ほ幸と爲すべきのみ。

晉の惠帝の立てるや、議者なほ武帝の倚任其の人を得ざりしを咎めたり。惠帝は嫡子にして年長じ、國を嗣ぐの常道に合せり、苟も達識者にあらずんば、其の人を易ふる能はざるなり。度宗は是れと異る。理宗子無く、度宗を立てんこそを吳潛に謀れり。潛曰く、臣は史彌遠の才なく、忠王（度宗）は陛下たる福德なしと、其の言の露骨にして愚昧なること驚くに堪へたり。

度宗の君たるに任へず、以て宋を亡ぼすに足れるものたるは、臣民具に之れを知れり。庶支より出でて、名位未だ正しからず、廢すべからざる理由あるにあらざりき。太祖の裔孫の中には、之れより愈れる者なければ、必ず之れを立てざる可からざりしといふに非ず。則ち、理宗晩年內寵多く、宦官は內に在つて君を惑はせ、姦臣は外に在つて權を弄し、度宗は柔軟無骨、外貌仁孝なるが如く見えたりしかば、小人等之れを以て上を惑はせ、度宗の嗣立を幸として門生天子の功に居らんと欲したればなり。故に吳潛が不可なりとしたるものは、正に賈似道が深く可なりとしたる所なり。度宗一たび位に立ち、膝を屈して慚づること無く、江萬里も之れを掖止すると能はず、果して小人の願欲を遂げたり、其の立つを得たる所以、知るべきのみ。河山虛しく棄てられ、廟社荒廢に歸せんこと、蓋し賈似道の豫期せし所なるべし。理宗が愚にして亡を招きたるも、亦甚だしきかな。

夫れ賢を選んで以て元良を建つるや、大臣に謀るは愼みを致すが爲めなり、之れを決するには獨斷を用ひて、大臣に一任せず。故に大臣は立儲の定策に與かつて翼戴の責に任じ、新君は恩禮を以て大臣を優遇すれども、之れを懷ふて私恩と爲すべからず。是れにあらずんば、權柄下に移つて、禍必ず家國に中る。故に昭子は豎牛を賞せずして、叔孫氏以て安く、漢の文帝の周勃に於ける、漢の宣帝の霍光に於ける、寡恩なりしといふと雖、亦綱維を宰制するの大義を奉ぜざるべからざるに因るなり。

天子は極尊無上のものなり。之れを扶けて天子たらしむれば、其の功德を恃

んで更に天子の上に臨むを得べし。故に小人は其の身を以て廢立の大權に任ずるを樂しみ、成るべく鈍才の者を立てゝ、己れの欲望を獨占し、禍亂是れより生じて救濟する能はざるに至るは、必然疑ふべきなし。且一躍して天位に登り、昨たる一身を以て重大艱難の任に當らんこと甚だ難し、況んや强寇境を壓するの日に於て、其の困難尤も之れに倍するをや。何ぞ錦衣玉食して堂に處るの嬉みを恩惠として之れを思念するに足らんや。天子の位を承けて以て子孫に及ぼすを得るに至りしは、是れ宗廟の靈、先君の義に賴る所、又天下臣民に推戴せられたる所にして、我れを助けて立たしめたる者が獨り其の功を貪るべきには非るなり。

寧宗が廢立を史彌遠に委ね、之れが爲めに理宗立つに至り、理宗之れに感じて恩となし、彌遠以て厚利を享け、姦人垂涎して之れに傚はんことを思ひしは、怪むに足らず。吳潛が、臣に彌遠の才なしといひしは、其の才なかりしに非ず、天位を賣つて大權を擅にせんとの姦謀なかりしなり。夫れ彌遠は、禍を避けんとするの情、福を迎へんとするよりも深く、私心を懷きて濟王を廢したりと雖、なほ密に理宗の器識を訪ひ、以て人を得んことを冀ふを知れり。故に理宗闇愚なりしと雖、初世の施設は、猶ほ觀るべきものありき。墮落して賈似道に至り、唯有れども無きに似たる童昏を立て、匍伏して己れに聽かしむるの奸計を廻らしぬ。是に於て敗殘の彊土も、其の放擲するに任せ、何人も之れを咎めんやうなかりき。要するに其の禍の由來は、寧宗に始まつて理宗に成り、一朝一夕の成果にはあらざるなり。夫れ韓魏公(韓琦)が北宋の英宗・神宗の卽位を贊けて後、速に引退を希ひたりしが如き公忠の心を以て、之れを史彌遠・賈似道の輩に望むは固とより不可なり。小人が天子の嗣立を贊けたる恩賞を冀ひ、天下隨て傾くの害も亦烈しと謂ふべし。故に王珪が、陛下富貴を以て子孫に傳ふるは皆、先帝の恩なりと云へるすら、君子之れを非とせり、天下を有し崇高の奉を享くるを感じて恩と爲すといふは、此れ鄕里の小生が應試に擧げられて其の推薦者を德とし、師父として之れに奉ずるが如く、正に貧寒の乞兒の心に外ならざればなり。此の如くにして亡びざるものは、未だ是れ有らざるなり。

第二節　匿武の用を知らずして宋亡びたり

小序　宋立國の初、武臣を抑へて武力の弱きを致し、其の弊を匡救する能はず常に北方の勁敵に壓迫せられて滅亡に了れり。本論は、宋の滅亡についての概論にして、國初以來人材を猜疑したること、人々空論を弄して實行を努めざりしこと等の外に、武力を養成し適當に之れを使用せざりしことを指摘し、宋の不振の重要なる原因こゝに在りと謂へり。

漢唐の亡べるは、皆自から亡びたるなり。宋の亡べるは、則ち黄帝堯舜以來道法相傳の天下を擧げて之れを亡ぼしたるものなり。是れ豈にたゞ徽宗欽宗以降の敗德多く、蔡京・秦檜・賈似道・史彌遠が姦私を挾みたるが爲めに、斯に至れるものならんや。其の由來する所漸あり。

古人治道を說きて、覿文匿武といへり。匿といふは、之れを銷すを謂ふに非ず之れを藏すること固く、之れを用ふること密にして、祟ぶを待たずして自から其の用を成すの謂なり。故に書に曰く、迪惟有夏、有室大競と。力强からずんば棟折れ榱崩れて、室を支へんこと難し。强うするといふも、必ずしも漢武隋煬が兵を遠塞に窮めて自から疲れたるが如きを謂ふにあらざるなり。一室の棟は一二のみ、構櫨榱桷相倚つて安く、以て室の强きを成すなり。故に用ふること專なれば、物盛ならず、守ること壹なれば、寇能く侵すなし。萬人を率ゐて相搏つに方り、一は一と相當り、群衆の力を用ひざるは非なり。

遼海より以西、夏州・朔州に至り、賀蘭山より以南洮州・岷州に至る以外の地は、水草を逐ひ騎射に巧にして、戰を好み殺を樂しみ、以て中國を睥睨する蠻族の住する所にして、古今相異るなし。三代の治千有餘歲、天子以て憂となさゞりしが、其の蠻夷を制したる道は、今考ふるに由なし。春秋より戰國に及び、中國自から相爭戰し、燕趙獨り自國の力を以て北陲を控制せり。秦人は關東の諸侯を防ぎ、餘力を以て獨り西邊を捍ぎ、東は力を齊に借らず、南は援を韓魏に借らざりき。江淮以南は、朔北に見るが如き勁敵の存したるを聞かず。秦が燕代を滅ぼし、六國を併呑するに及んで、天下の力を擧げて胡族を防ぎぬ。匈奴始めて大なるや、漢は力を竭して之れを禦ぎ、終に之れを抑ふる能はず。靈帝・獻帝の世に至つて、中國復た分れ、劉虞・公孫瓚・袁紹は北塞の患ありしを聞かず。曹操起つて之れを撫

し、鮮卑・匈奴皆内地に徙れり。蜀呉には之れなし。晉三國を併せて五胡競ひ起り、唐に及ばんとする頃、突厥・奚・契丹相仍つて中國を騒がしぬ。安史の亂に及んで、河北の叛臣、各、數州の土に據つて天子に抗し、而して薊雲(燕雲)の邊警を聞かざること百年なりき。是れに由つて言へば、天下を合して強からんことを求むれども強からず、數州を控へて武を藏し、而して頗る強きものあり。則ち中國が此の崇文の地を衞る所以の道、大略知るべきなり。

東漢の強は、西漢に敵せずして、然かも北顧の憂なかりしは、黎陽の屯ありしを以てなり。天寶以後、内亂方に興り、開元以前に敵せずして、然かも山後の驚なかりしは、魏博の牙兵ありしが故なり。外は漁陽・上郡・雲中の守を重んじて、黎陽は其背後を承け、外は盧龍・定難・振武の節度使を建てゝ、魏博は其威を輔けぬ。其地を以て其人に任せ、其人を以て其地を守らしむれば、金粟自から足り、士馬自から優れ、險隘自から固く、甲仗自から備はり、巡邊の大臣其簿責を督するを要せず、遙制の廷臣其進止を制するを要せず、寡といへども衆く、弱と雖強かるべきなり。

故に、天子道有り、守四夷に在りといふは、四裔の邊臣各、自から守りて天子の之れを守るを待たざるを謂ふなり。天下を率ゐて、自から守るべきに非るの地を守れば、心弛みて自から忘り、遠人を奔走せしめて、未熟の生地に戰はしむれば、其力先づ竭きて必ず潰ゆるなるべし。然るに庸主具臣の謀、常に必ずこゝに出づるといふは、事已に迫つて後、中國を疲らしても爭はざるを得ざるに至り、雖未だ現はれざる時は、唯將帥が兵を恃んで上を侵さんことを恐るゝに因るなり。

嗚呼宋が天維を裂き地綱を傾け、人群を亂し、無窮の禍を遺したるは、其の故こに在り。不正にして天下を得たりしかば、功臣を猜疑排斥するを勉め、天下を制するの權に乏しかりしかば、深く尾大振はざるべきを忌めり。前には佞臣趙普ありて、其の君の猜妬の私情に迎合し、次では庸才畢士安出でて、群民の姑息にして逸を貪るに、任せたり。是に於て關南河北、數千里の間、寂として任ずるに堪ふる人なく、勁敵戰馬を驅つて突入するに及び、乃ち南方不教の兵を驅り、天下を震動せしめて之れを禦ぎたりしも、未だ戰はざるに先だつて惑亂し、一潰して其の鄉曲に走り歸れり。武を藏するの道を講ぜずして、何ぞ能く強きことを得ん。悠遠なる上古に成れる立國の大業も、宋に至つて百年の間に糜散したり。嗚呼

天問ふべからず、是の極に至らしめたるは、果して誰の所爲ぞや。燭に宋をして五代僭僞の諸國を削平したる時に當り、重兵を河北に宿し、人を擇んで之れに任じ、君は人材に對する猜嫌を棄て、衆は濫に當事者を誹らず、三關に臨んで契丹を扼せしめば、假令燕雲を席捲する能はざる迄も契丹亡んで後、女眞內地を蹂躪するが如きこと無かりしならん、亦何ぞ中洲を棄てゝ完顏氏の墳墓となし、蒙古を招きて、淮泗に臨ましむるに至らんや。

中國は聲名文物の地なり、同じくこゝに生れ、竝んでこゝに育せられ、互に相輔け相勵ますべき筈なるに、相忌むこと芒刺の背に在るが如くなるは、威足らざるなり、信固からざるなり、治整はざるなり。其の人を棄て、其の土を曠うし、滾を以て家を支へ、然かも棟已に折れたるや久し。宋が道を失ひて、かくの如く愚なるに至らしめたるは、是れ孰れの罪ぞや。

宋朝史論終

大正七年八月廿五日印刷
大正七年八月廿七日發行

宋朝史論　全
（非賣品）

著作權所有

編輯兼發行者　興亡史論刊行會
右代表者　松宮春一郎　東京市牛込區榎町七番地
印刷者　本間十三郎　東京市牛込區榎町七番地
印刷所　日清印刷株式會社　東京市神田區今川小路一丁目一番地
製本者　山縣純次　東京市麴町區下六番町十六番地

發行所　興亡史論刊行會
電話番町二五六六番
振替東京三七八二七番

刊行書目

第一卷 世界史論進講錄 ケッペル原著
第二卷 ケーザル時代羅馬史論 ナポレオン三世原著
第三卷 露西亞史論 クリウチェフスキ原著
第四卷 佛蘭西革命史論 スタイン原著
第五卷 英國膨脹史論 シーレー原著
第六卷 普魯西勃興史 トライチケ原著
第七卷 韜略經國策 マキヤヴェリ原著
第八卷 英國憲政論 バジョット原著
第九卷 歐洲思想史 ヴィンデルバント原著
第十卷 宋朝史論 王船山原著
第十一卷 史論叢錄（上） 諸家原著
第十二卷 史論叢錄（下） 諸家原著

編輯及飜譯顧問者

帝大教授文學博士 箕作元八　理學士 田邊尚雄
帝大教授文學博士 白鳥庫吉　陸軍大學教官 司馬亨太郎
帝大教授文學博士 建部遯吾　文學士 松井等
帝大教授文學博士 市村瓚次郎　學習院教授文學士 堀竹雄
帝大教授文學博士 田中義成　早大教授 吉田世民
帝大教授文學博士 村川堅固　早大教授 北昤吉
帝大講師文學博士 大類伸　文學士 井上忻治
ドクトルヒロツフイエ 長瀨鳳輔　文學士 前川三郎
文學士 煙山專太郎　文學士 松本重彥
高等師範教授文學士 中村久四郎　文學士 加藤政司郎
高等師範講師文學士 綿貫哲雄　文學士 淺田清造
外國語學校伊語教授 吉田彌邦　齋藤茂
文學士 原勇六
文學士 常田宗七
學習院學士 松宮春一郎

編輯顧問及飜譯の勞を執らるゝ別記諸先生以外に、特命全權公使法學博士安達峰一郎、海軍大學校長海軍中將佐藤鐵太郎、法學博士戸水寛人、東京法科大學教授法學博士松崎蔵之助同農法學博士新渡戸稲造、廣島高等師範學校長文學博士幣原坦、法學博士蜷川新、學習院教授文學博士瀨川秀雄、伯爵副島道正、竹越三叉、田中王堂の諸先生は、本叢書の採擇編輯等に關し、特に懇切なる指導と注意とを與へられたり。

略規

一會費　一時拂前金貳拾貳圓毎月拂前金貳圓入會金貳圓（但最終會費に充當す）

別に送本料を要す毎卷左の通り
東京市內 金四錢　地方 金十二錢
臺湾朝鮮 金十六錢　海外 金三十錢

一刊行　大正七年一月開始同十二月終了毎月一卷宛刊行四六版洋裝九ポイント新活字印刷毎卷五百頁以上

355
89

終